

談話における共通基盤 (common ground)の役割と引用をめぐる

1. はじめに

(1) 2016 年 3 月 8 日、東日本大震災と東京電力福島第一原発の苛酷事故から 5 年を迎えようとしている時に、フジ TV の情報番組「夕方 Live ワンダー」で、事故当時内閣府原子力安全委員会委員長だった斑目春樹氏のインタビューが放送された。斑目氏は次のように語った。

福島第一原発の事故が起きたとき、菅首相（当時）が「水素爆発は起きないか」と私にたずねた。私は「起きないだろう」と答えたが、その数時間後に水素爆発が起きた。しかし私はまちがったことは言っていない。原子炉の圧力容器は窒素充填されていて、酸素がないので水素爆発は起きない。しかしもし水素が圧力容器の外に漏れていたら、そこには酸素があるので爆発が起きる。私は圧力容器は壊れておらず、水素が外に漏れていないという前提で話をした。だから私はまちがったことを言ったわけではない。

【問題】

「水素爆発は起きない」という斑目氏の述べた文は真か偽か。斑目氏は正しいことを言ったのか、それともまちがったことを言ったのか。

【考察】

一般に文の意味は文脈によって変わる。文の意味は文脈依存的 (context dependent) である。文脈を形作る要素のひとつに前提 (presupposition) がある。前提は「共通基盤」(common ground)、もしくは共有知識 (shared knowledge) とも呼ばれることがある。CG は発話時点 (t_0) において話し手と聞き手が想定している可能世界 (possible world) の集合である。どのような CG と相対的に命題を解釈するかによって命題の真偽は異なることがある。

《斑目氏の CG》

CG (m) = 原発事故が起きていて、圧力容器が壊れていない世界

《菅首相の CG》

CG (k) = 原発事故が起きていて、原子炉の状態が不明な世界 (あらゆることが起こりうる世界)

命題「水素爆発は起きない」は CG (m) において、そして CG (m) においてのみ真である。CG (k) においては、真であるか偽であるか決定できない (圧力容器が壊れているかどうか分からないため)。斑目氏は、「圧力容器が壊れていなければ水素爆発は起きないが、もし壊れていたら起きる可能性がある」のように、CG (m) と CG (k) の差分を明示的に解消して、CG (m) = CG (k) とした上で発言するべきであった。斑目氏の発言は、CG の調整を怠ったという意味において、適切な発言であったとは言いがたい。

(2) 命題の意味解釈の原則

命題の真偽を決定するには、次の原則を適用しなくてはならない。

原則

命題の真偽は発話時点 (t_0) において想定されている common ground に相対的に決まる。

(3) 日本語学習者の引用ストラテジー

鎌田修『日本語の引用』ひつじ書房、2000.によれば、他者の発言を引用するとき、外国人の日本語学習者はかなり上級の人でも次のような過ったストラテジーを用いることが多く観察されるという。

- a. (カンタス航空の) 切符の reservations の女の人は京大で経済を勉強しました。でも、私は彼女にあなたは後で Qantas の経済かん、経済課で働くつもりですか、あ、彼女はいいえと言った。あ、これは私の仕事です。あ、たぶん、あとで結婚しましょう。私はびっくりした。京大はいるのすごく… (アメリカ英語母語話者)
- b. 始めに、あのう、LさんがX先生に、あのう、なぜ日本語を教えてらっしゃいますかと訊いたら、X先生が最初は日本語の先生になるつもりがなかったとおっしゃっていました。最初は大学は国語学の専門として、助詞、日本語の助詞がだんだんなくなってきたという傾向について論文を書きました。(アメリカ英語母語話者)
- c. はい、でも大きい会社には去年三石で研修しました。(部長とインタビューしました) この人の奥さんは、ま、いま、たくさん文句言います。ヨーロッパで生活はもっと楽しかった。(フランス語母語話者)
- d. 私は韓国人友達に頼みました。他の人といっしょに国際結婚について話してください。(韓国語母語話者)

日本語では他者の発言を引用するときは、引用の後に「…と言った」「…とたずねた」のような発言動詞 (utterance verb) を次の下線部のように付加しなくてはならない。

- a'. 私は彼女に「あなたは後でカンタス航空の営業部で働くつもりですか」とたずねました。すると彼女は「いいえ」と言いました。そして「これが私の仕事です。将来は結婚するつもりです」と言いました。私はびっくりしました。

(4) 小説における直接話法

レイコさんはにっこりと笑って、ライターで煙草に火をつけた。「あなた年のわりに女の人の喜ばせ方よく知っているのね」

僕は少し赤くなった。「僕はただ思っていることを正直に言ってるだけですよ」

(村上春樹『ノルウェイの森』下)

- (5) ただし、このような独立した会話文の使用は小説の技法であって、日常会話などでは (42) [= (4)] のような言い方はしない。かならず、(43)のように、「～と言った」というような形式をつける。

(43) レイコさんはにっこりと笑って、ライターで煙草に火をつけた。「あなた年の

わりに女の人の喜ばせ方よく知っているのね」と言った。

(野田尚史「真性モダリティをもたない文」、新田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版、1991)

(6) 疑問

他者の発言を引用するときに「～と言った」のような発言動詞(=主節)を付けないという現象が、小説における直接話法と、外国人の日本語学習者に共通して見られるのはなぜか。両者は独立した事象なのか。それとも関連があるのだろうか。

2. 真性モダリティをもたない文

(7) モダリティとは何か

モダリティとは、一般に、「話し手の発話時における心的態度の直接的な表現」というふうに考えられている。

たとえば、(1)の文は、話し手の発話時における「感情表出」といったモダリティをもつとされる。

(1) 沖縄の海で泳いでみたいなあ。

(2)の文は、発話時における感情表出をおこなっているのではなく、過去の事実を客観的に述べているだけなので、「叙述」といったモダリティをもつとされる。

(2) あのころは、ひとりで暮らしてみたかった。

このほか、「命令・依頼」「質問」「意志」などいろいろなモダリティが考えられるが、いずれにして、文というものはかならずモダリティをもつとされている。

それでは、(3)の第1文は、どんなモダリティをもっているのだろうか。

(3) 大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたい。 そんな思いから、愛媛県喜多郡内子町川中、農林業西谷一徳さん(41)は、自宅前の山林と農地七千平方メートルをつぶして専用飛行場を作り、今月初めから超軽量飛行機の操縦を楽しんでいる。

この文は、「…見てみたい。」という形になってはいるが、話し手[ここではこの記事の書き手：引用者注]の発話時の感情を表しているわけではない。また、他人の感情を事実として認定して叙述しているわけでもない。

(野田尚史「真性モダリティをもたない文」、新田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版、1991)

(8) 真性モダリティと虚性モダリティ

野田は次の例のように、「叙述」「感情表出」「命令・依頼」「意志」など、話し手の心的態度を直接に表す形式を持つとき、それらの文は**真性モダリティ**を持つとする。

- a. あのときは僕は夢中だった。
- b. 卒業したら家業を継ぎたい。
- c. ちょっとどいてください。
- d. 明日は早く起きる。

これにたいして次の例では、感情表出を表す「たい」が過去の助動詞「た」の持つ叙述モダリティに包み込まれてしまっており、この場合、文は虚性モダリティを持つとする。

e. あのころは、ひとりで暮らしてみたかった。

野田によると、虚性モダリティはこれ以外に次のような場合がある。

(A) 従属節・引用節の中で

e. 日本海に沈む夕日を見たいので、岬のホテルを予約しました。

f. 山口さんは「卒業したら、家業を継ぎたい」と言っていた。

(B) 野田の論文で取り上げている次のような例 [(7)の例(3)も同様]

g. むろん、こうした状況に満足し切っているわけでもあるまい。出来るならば、付き合い始めた頃のように、心をときめかせながらデートをしたい。そう思っているはずだ。

(田中康夫『東京ステディ・デート案内』)

(9) 真性モダリティをもたない文の種類 (野田 1991 による)

(A) 他の文に従属しているもの

次の a. の下線部は見かけは独立節だが、意味を変えずに b. のように書き換えることができることからわかるように、「そういわれる」に従属しており、真性モダリティを持たない文である。

a. それぞれの国民は、己に似合った政治家を持っている。あるいは、その程度の政治家しか持てない。そういわれる。

b. それぞれの国民は、己に似合った政治家を持っている、あるいは、その程度の政治家しか持てないといわれる。

(B) 文章・談話の枠に依存しているもの

文章・談話の種類によって、現れることができるモダリティに制約がかかることがある。たとえば日記には、命令・依頼・質問などのモダリティは現れない。

次の例はテレビ映画の粗筋である。

c. 四人の娘を残し妻に先立たれた男。定年を迎えた彼は退職金を五人で平等に分けるが、分配した金が思わぬ悲喜劇を巻き起こす。

映画や小説の粗筋、料理の作り方、器具の使用説明書、ダンスの踊り方などの手順の説明は、真性モダリティを持たない。

また小説、ニュース報道、日記、紀行文などは、基本的に過去の叙述というモダリティしか持つことができない。

d. 早朝出発。春らんまんの筑後川を下る。川の両側の広い土手に菜の花のカーペットがずっと続く。
(野田知佑『日本の川を旅する』)

e. バスが白い蒸気を吐いて走り去ると、白い破片が散乱する夜に彼ひとりが残された。碧川宏は背広の襟をたてると、停留所に備えつけられた待合用のボックスに入った。待合用といっても廂に守られただけの狭い場所である。それでも何とか雪を避けることはできた。
(連城三紀彦『暗色コメディ』)

(10) 真性モダリティをもたない文の特徴 (野田 1991 による)

(A) 文全体を受ける指示語が他の文の中にある

- a. 若くて魅力的な女性が「肩でもほぐしませんか」とほほえみながら部屋を訪れる。この誘いに乗ったばかりにトラの子の旅費をごっそり盗まれるという事件がシンガポールで続発している。

[東郷注] これは真性モダリティを持たない文だけが持つ特徴ではない。真性モダリティを持つ文でも、文全体を受ける指示語がある場合がある。

- i) 片桐は先月、駅の待合室でうとうとしているあいだに荷物を盗まれた。この事件があつてから、片桐は用心深くなった。

(B) 文全体を他の文に従属節として埋め込むことができる

- b. まったく同じ品物やサービスなのに値段が違う。そんな混乱を消費税が運んでくるのではないか、という不安がささやかれている。

→まったく同じ品物やサービスなのに値段が違うという混乱を消費税が運んでくるのではないか、という不安がささやかれている。

(C) 「～たい」「ほしい」などの人称制限から解除されている

真性モダリティを持つ文では、意志・欲求・感情・感覚などを表す用言の主語は 1 人称に限られるという人称制約がある。

- c. 僕はひとり暮らしがしたい。
d. ?君はひとり暮らしがしたい。
e. *田中君はひとり暮らしがしたい。

しかし真性モダリティを持たない文では人称制約が解除される。

- f. 何としてでも夢をつなげたい。中日と 4・5 ゲーム差がついた今、首位を争う”切符”を得るのはこの広島戦 2 連勝以外はない。巨人の気迫が広島にプレッシャーをかけた。

(D) ていねい体から解除されている

- g. 女を食べ物にする、ということにかけては、なんととってもヤクザが一番で、役者なんて足元にもよれない。生まれてこのかた、頑にこう信じてきた私です。

(E) 主題の「～は」を含まない

- h. そのうえ、これが今場所最後の横綱戦となる逆鋒が気合十分。いつも以上に思い切つて向かってきたのも誤算だった。

(F) テンスの分化がない

真性モダリティを持たない文では、絶対テンスが現れにくく、ル形が基本である。

- i. マンションの廊下を足早に通る。ドアもほんの少しだけ開けて、すつと入ってしまう。
長男は「いつも急いでいる子」だった。

(11) 真性モダリティをもたない文の機能 (野田 1991 による)

(A) 主張をもたない

次の a. の「買った」、c. の「おいしい」は主節述語として使われており、叙述のモダリ

ティを持ち話し手の主張を表す。一方、b.の「買った」、d.の「おいしい」は連体修飾節の中で使われており、話し手の主張を表さない。

- a. 先週ワープロを買ったよ。
- b. 先週買ったワープロがもう故障したよ。
- c. ぶりのさしみはおいしい。
- d. おいしいぶりのさしみが食べたい。

真性モダリティを持たない文も話し手の主張を表さない。

- e. たった一人の抵抗で、老朽マンションが建て直せない。薄気味わるい暴力団のおにいさんを追い出すことができない。そんな苦情を解決するために、マンション法改正案が出された。

(B) 視点の移動がある

- f. 章子は身籠もっていることに気づいたとき、こんな狭いアパートの一室で赤ん坊を育てることは不安だったが、赤ん坊がいればこの孤独から救われるだろうと思った。それに桂策も少しは家庭を大事にする気になるかもしれない。(津村節子『重い歲月』)

【東郷注】

下線部は小節の登場人物の章子の「内的独白」である。野田 (1991) はそのことをもって視点の移動があるとしているのだが、小説というジャンルの特性により、下線部より前にすでに視点に移動が起きていることに注意しよう。「こんな狭いアパート」の指示詞「こんな」、「この孤独」の指示詞「この」は、「～と思った」を主節とする間接話法内において章子を直示中心とする近称であり、章子の視点から用いられている。

3. 真性モダリティと国語学の「陳述論」

まず野田論文で用いられている「モダリティ」という用語が国語学・日本語学独特のものであり、言語学で一般に用いられている意味とずれていることに注意する必要がある。

(12) 言語学一般の「モダリティ」

一般に modality は、mood and modality と並列されるように、mood 「法」と関係が深い。法は、英語ならば直説法 (indicative mood)、命令法 (imperative mood)、仮定法 (subjunctive mood) の別があり、動詞の活用形に反映される。

a. 直説法 *I bought a bicycle yesterday.* → fact-mood

b. 命令法 *Stay here.*

c. 仮定法 *If I were you, I wouldn't buy this house.* → thought-mood

modality はふつう動詞の活用形として現れる mood 以外で、叙述内容にたいする話し手の心的態度を表す文法的手段をさす。

d. 法助動詞 (modal auxiliary) : can, must, want, may, ought, should, might, etc.

You may come in. [許可]

It can't be true. [非現実性]

e. 法副詞 (modal adverb) : certainly, perhaps, maybe, obviously, etc.

You'll certainly get well if you take this medicine. [確実性]

f. ある種の非人称文

It is necessary that you should do that at once. [必要]

It is possible that the roads will be crowded. [可能性]

(13) 国語学の「陳述論」

国語学の世界においては、「文」とは何かを規定するにあたって「陳述」論がさかんに行なわれた。「陳述」という用語を初めて用いたのは山田孝雄 (やまだ よしお) である。

「一の句とは統覚作用の一回の活動によりて組織せられたる思想の言語上の発表をいふ。」
(山田孝雄『日本文法論 上』1902)

N.B. 山田の「句」とは「文」のこと

(14) 『「陳述をなす」というのは、主位の観念と賓位の観念との関係を明かにする思想の作用を内面の要素として、これを言語の上に発表することである。(…) 文において、用言が、主格に対して述格に立つ語 (=述語) と言われるのは、一般に用言は、その中に、ある属性観念と同時に陳述の力を併せ有するからである。用言の用言たるゆえんは、まさにこの、陳述の能力を有して述格に立ち得るところにあり、また、本質上述格に立ち得るものは用言の外にない — と、[山田孝男は] 説くのである。」 注:[]内は東郷が付加。

(阪倉篤義「陳述」、『日本の言語学』第3巻、文法 I、大修館書店、1978)

【解 説】

述語となる用言自体に陳述の力があると山田が考えた理由のひとつは、日本語には西洋語のような動詞活用がなく、辞書形 (終止形) である「寒い」「流れる」がそのまま述部として文を形成するからである。

- a. 風が寒い。
- b. 水が流れる。
- c. 寒い！

これにたいして、英語やフランス語では動詞や形容詞の辞書形（原形、不定形）は、そのままでは文を作れない。動詞はある法・時制・人称に活用しなければならず、形容詞にはコピュラ動詞を付けなくてはならない。

- d. The president {is / *be} in his office.
- e. Marie {aime / *aimer } le chocolat. マリーはチョコレートが好きだ。
- f. *Peter tall. / Peter is tall.

(14) ゼロ記号の辞

「山田が用言に陳述の力があるとしたのを、時枝は、実は言語主体が用言において陳述を表しているのだと考え、客体的表現（詞）である用言の後に、別に主体的表現（辞）である陳述が表現されているのであって、たとえば『犬が走る』のような文は、文末に陳述がゼロ記号で表現されていると見るべきだと説いて、これを、

犬が走る ■ (■はゼロ記号の陳述を表す)

と図示するのである。」(Ibid.)

(15) 叙述と陳述

「叙述のいとなみとは言うまでもなく、叙述内容の構成要素である個々の概念を、話手が有機的に結合させてゆくことによっていとなまれる。さきの(b)を例にとって言えば、〔明日〕という時日、〔煙草〕という嗜好品、〔やめる〕という意識的な行為、以上三つの概念を素材として、これらを有機的に結合させる話手のいとなみがあつて、「明日から煙草をやめる」という叙述内容が出来上がるのである」

「終助詞によって代表される右の様な言語者めあての主体的なはたらきかけを、内容めあての叙述と区別して『陳述』と呼ぼう。叙述と陳述をこの様に区別することは、日本語の文の構造を次のように考えることを意味する。叙述のいとなみは叙述内容を描き上げることによって解消する。叙述内容 [=明日から煙草をやめる] は、

明日から煙草をやめるのは体のためばかりではないのです
 の場合の様により大きな叙述の為の素材であるか、又はそうではない

明日から煙草をやめるよ

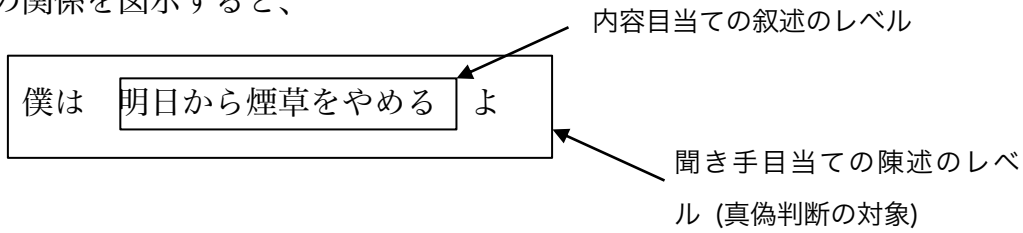
の様な場合も陳述の為の素材であるにすぎない、文は叙述全体が陳述に被支配的にうけつがれることによって成立する、と考えるのである」

(渡辺実「叙述と陳述 — 述語文節の構造」、『国語学』13 卷 14 号、1953；『日本の言語学』第 3 卷、文法 I に再録)

【解 説】

「明日から煙草をやめる」を陳述の素材とする見方は、後に尾上圭介に引き継がれる。ここで「僕は」が付いていないことに注意。文の主題である「僕は」を付すると、もはや素材であることを止め、「聞き手めあて」の陳述のレベルに移行すると考えられる。益岡隆

志の言い方を借りれば、単なる文の素材から「真偽判断のレベル」に移行するのである。この関係を図示すると、



まとめると次のようになる。

叙 述	陳 述
a) 文を作る「素材」であり、それ自体は文ではない。文以前のものである。	素材を組み合わせ陳述の力を加えて文となったものである。
b) 内容目当て：「雨が降る」のように事態を描くことに主眼がある。	聞き手目当て：「雨が降るかもね」のように、内容を聞き手に伝えることに主眼がある。
c) 事態を描いているだけなので、真偽判断の対象にならない。	内容に陳述が加わっているので、真偽判断の対象になる。
d) 「…は…だ」の係り結びを持たない。	「…は…だ」の係り結びを持つことができる。

(16) 渡辺の「叙述」と「陳述」の区別は、Langacker の提唱する認知言語学の Grounding の概念と似たところがある。

A noun profiles (i.e. designates) a thing and a verb profiles a process (each in an abstract sense of the term). By itself, however, a simple noun or verb merely specifies a thing or process type, whereas a full nominal or finites clause designates a grounded instances of that type. The term ground is used for the speech event, its participants, and its immediate circumstances. A nominal or a finite clause incorporates some element which specifies a relationship between the ground and the thing or process it designates.

(Langacker, R. W., “Remarks on the English grounding systems”, Brisard, F. (ed) *Grounding. The Epistemic Footing of Deixis and Reference*, Mouton de Gruyter, 2002)

名詞は事物をプロファイルし (=指し)、動詞は出来事をプロファイルする(「事物」「出来事」という用語は抽象的な意味で用いている)。しかしながら、名詞も動詞も単独では事物のタイプ、出来事のタイプを指すにすぎない。名詞句や定形動詞となつてはじめて、そのタイプの具体化された(グラウンド化された)実例を指すことができるのである。グラウンドという用語は、発話と発話の参与者および発話を取り巻く状況を指す。名詞句や定形動詞を持つ文には、指している事物や出来事とグラウンドのあいだの関係を表示する何らかの要素が含まれている。

Grounding is proposed as a technical term in Cognitive Grammar to characterize grammatical predications that indicate the relationship of a designated entity to the ground or situation of speech, including the speech event itself, its participants, and their respective spheres of knowledge. By definition, grounding predications are obligatory grammatical elements needed to turn nouns into full nominal, and verbs into finite clauses. When this happens, the resulting nominal designates an

instance of the thing type presented by the head noun, just like a finite clause is taken to designate an instance of the process type expressed by the main verb. This selection of instances is made possible by the very nature of the grounding function, which incorporates some relation between the ground and a designated process or thing whose main import can arguably be called “deictic”. (...) In a language like English, the class of grounding predications includes demonstratives, articles, and a number of quantifiers for nominal, and tense and modals for finite clauses. (Brisard, F. “Introduction: The epistemic basis of deixis and reference”, Brisard, F. (ed) *Grounding. The Epistemic Footing of Deixis and Reference*, Mouton de Gruyter, 2002)

グラウンド化というのは認知文法において用いられる専門用語で、[文によって] 示された事物や事態と、グラウンド、すなわち発話そのものを含む発話状況・話し手と聞き手・両者の保有する知識などとのあいだの関係を表示する文法的手段をさす。その定義からして、グラウンド化の文法的手段は、単なる名詞を名詞句に変え、[原形の] 動詞を定形節に変えるために必要とされる文法的要素である。このような変換を経たのちには、名詞句は主要部の名詞が表す事物のタイプの具体的実例をさし、定形節もまた主要部動詞が表す出来事タイプの具体的実例をさす。このように具体的な実例を選び出すことができるのは、まさにグラウンド化の機能の持つ性質による。グラウンド化機能によって、[文の中で] さされた事物や出来事とグラウンドの関係が示されるのであり、その中心的な役割はまちがいに「直示」である。(…) 英語のような言語でグラウンド要素に含まれるのは、名詞句については、指示詞、冠詞、および多くの数量詞で、定形節については時制と法である。

【考 察】

上の引用から明らかなように、ラネカーの言う grounding は名詞や動詞の表す抽象的意味(内包、タイプの意味)を具現化し、話し手・聞き手のいる発話の場へと投錨(anchoring)して外延(トークンの意味)を得る操作をさすが、渡辺の言う「叙述」と「陳述」の区別は文が持つ断定(assertion)の力に関係するところが大きい。その意味で両者は似ていながらも力点が異なる。

(17) 欧米の言語学では、グラウンド化を重視する Langacker のような考え方はむしろ少数派で、「文を文たらしめているものは何か」という問いはあまり見られない。その理由のひとつは、欧米では古代ギリシア時代より、文の基本構造は〈subject — predicate〉であると考えられていて、述語が動詞のときは活用が必要で、述語が形容詞のときはコピュラが必要であることは当然視されてきたせいであろう。

(18) 疑 問

渡辺のあげる例「明日から煙草をやめる」は叙述(陳述を作るための素材)であり、次のように大きな構造の一部になったり、聞き手目当ての要素を付け加えて陳述、すなわち実際のコミュニケーションにおいて聞き手に向かって発話される文になるという。

- a. 明日から煙草をやめるのは体のためばかりではないのです。
- b. 明日から煙草をやめるよ。

では渡辺の言う「叙述」(素材)は、野田の言う真性モダリティを持たない文と同じものなのだろうか。

- c. 何としてでも夢をつなげたい。中日と 4・5 ゲーム差がついた今、首位を争う”切符”を得るのはこの広島戦 2 連勝以外はない。巨人の気迫が広島にプレッシャーをかけた。

【考 察】

野田の言う「真性モダリティ」とは、「叙述」「命令・依頼」「質問」「意志」など、文が必ず持たなくてはならない聞き手目当ての意味 (=コミュニケーションに必要な意味) であり、これは渡辺の「陳述」と等価値のものである。しかし、上記 c. の「何としてでも夢をつなげたい」には「意志」のモダリティを表す助動詞「たい」がある。文型だけを見ると陳述としての資格を備えている。たとえば次の談話では立派に陳述として働く。

d. A: 「君はどうしたいの？」

B: 「何としてでも夢をつなげたい」

ところが c. の「何としてでも夢をつなげたい」には真性モダリティがないとされる。したがって野田の言う「真性モダリティを持たない文」あるいは「虚性モダリティを持つ文」というのは、渡辺の言う「叙述」(素材) と同じものではない。「何としてでも夢をつなげたい」は陳述を表す文として適格でありながら、なぜか陳述を持たない文なのである。したがって「真性モダリティを持たない文」の提起する問題は、陳述論に回収することができないことがわかる。

4. 引用論への展開

(19) 真性モダリティを持たない文と引用論の接点

- a. 大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたい。そんな思いから、愛媛県喜多郡内子町川中、農林業西谷一徳さん (41) は、自宅前の山林と農地七千平方メートルをつぶして専用飛行場を作り、今月初めから超軽量飛行機の操縦を楽しんでいる。
- b. たった一人の抵抗で、老朽マンションが建て直せない。薄気味わるい暴力団のおにいさんを追い出すことができない。そんな苦情を解決するために、マンション法改正案が出された。

【考 察】

a. の下線部は記事が紹介する西谷一徳さんの願望であり、西谷さんを主体とするモダリティを表している。これは西谷さんの思いだから、

c. 「(私は) 大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたい。」

のように、直接話法にして括弧に入れてもよい。b. の下線部は日本全国にある老朽化したマンションの住人の想いを代表したものである、次のようにしても同じである。

d. (老朽マンションの住人は) 「たった一人の抵抗で、老朽マンションが建て直せない。薄気味わるい暴力団のおにいさんを追い出すことができない」と嘆いている。

(20) 自由間接話法

第三者の発言や思考内容を引用符を用いずに地の文に紛れ込ませる技法は、「自由間接話法」(free indirect speech) と呼ばれている。ドイツ語では「体験話法」と呼ばれる。

- a. 直接話法 John returned home. He thought, “I will do better tomorrow.”

b. 間接話法 John returned home. He thought that he would do better the next day.

c. 自由間接話法 John returned home. He would do better tomorrow.

(21) 仮 説

野田の言う「真性モダリティをもたない文」の一部は、一種の自由間接話法だと考えられる。「～たい」などのモダリティを表す形式を備えていながら真性モダリティを持たないのは、これらの文が他者の発言・思考を引用しているために、その形式が話し手（書き手）のモダリティを表すと解釈できないからである。この意味で「真性モダリティをもたない文」は、談話レベルにおける一種の「引用」である。他者の思考内容を断りなしに地の文に引用しているのである。

【考察】

このように真性モダリティをもたない文が一種の引用だと考えると、いくつかのことが自然に説明できる。

(A) 従属節・引用節も真性モダリティを持たないという事実と符合する。

a. 山口さんは「卒業したら、家業を継ぎたい」と言っていた。

(B) 従属節に埋め込むことができることを説明できる。

b. このままでは日本が消滅してしまうのではないか。 そう不安に思うのも無理はない。

c. 「このままでは日本が消滅してしまうのではないか」と不安に思うのも無理はない。

(C) 「～たい」などの意志動詞、「ほしい」などの願望動詞、「悲しい」などの感情述語の人称制約が解除されていることが説明できる。

d. 何としてでも夢をつなげたい。 中日と 4・5 ゲーム差がついた今、首位を争う”切符”を得るのはこの広島戦 2 連勝以外はない。巨人の気迫が広島にプレッシャーをかけた。

e. 巨人の選手たちは「何としてでも夢をつなげたい」と願っていた。中日と 4・5 ゲーム差がついた今、首位を争う”切符”を得るのはこの広島戦 2 連勝以外はない。巨人の気迫が広島にプレッシャーをかけた。

(D) ていねい体から解除されていることを説明できる

f. 女を食い物にする、ということにかけては、なんととってもヤクザが一番で、役者なんて足元にもよれない。 生まれてこのかた、頑にこう信じてきた私です。

g. 「女を食い物にする、ということにかけては、なんととってもヤクザが一番で、役者なんて足元にもよれない」と生まれてこのかた、頑にこう信じてきた私です。

(E) 主張を持たないということを説明できる。

h. それぞれの国民は、己に似合った政治家を持っている。あるいは、その程度の政治家しか持てない。 そういわれる。

i. 一般に「それぞれの国民は、己に似合った政治家を持っている。あるいは、その程度の政治家しか持てない」と言われている。

(F) 視点の移動があることを説明できる

j. 章子は身籠もっていることに気づいたとき、こんな狭いアパートの一室で赤ん坊を育てることは不安だったが、赤ん坊がいればこの孤独から救われるだろうと思った。そ

れに桂策も少しは家庭を大事にする気になるかもしれない。(津村節子『重い歲月』)

- k. 章子は身籠もっていることに気づいたとき、こんな狭いアパートの一室で赤ん坊を育てることは不安だったが、赤ん坊がいればこの孤独から救われるだろうと思った。「それに桂策も少しは家庭を大事にする気になるかもしれない」とも考えた。

(22) ところが野田の言う真性モダリティをもたない文のなかには自由間接話法と見なすことができない例もある。

- a. 四人の娘を残し妻に先立たれた男。定年を迎えた彼は退職金を五人で平等に分けるが、分配した金が思わぬ悲喜劇を巻き起こす。
- b. マンションの廊下を足早に通る。ドアもほんの少しだけ開けて、すっと入ってしまう。長男は「いつも急いでいる子」だった。

a. はドラマの粗筋で、b. は語りの文脈において登場人物によって習慣的に繰り返された出来事を列挙している。これらの下線部は第三者の発言・思考を表すものではないので、引用と見なすことができない。このような例については、「一種の自由間接話法」という言い方をより精緻化して、「二重の場」を考えるとときにまた触れる。

5. 直接話法と「二重の場」

(23) 意志・願望・感情述語の人称制約

日本語には意志・願望を表す助動詞や、「悲しい」「寒い」などの感情・感覚を表す形容詞は、基本的に一人称でしか用いることができないという制約がある。

- a. 私は家業を継ぎたい。
- b. ??君は家業を継ぎたい。
- c. *柴田君は家業を継ぎたい。
- d. 柴田君は家業を {継ぎたがっている / 継ぎたいらしい / 継ぎたいようだ}。
- e. 私は悲しい。
- f. ??君は悲しい。
- g. *岸上は悲しい。
- h. 岸上は {悲しんでいる / 悲しがっている / 悲しく感じている}。

【問 題】

なぜ直接話法による引用ではこれらの述語の人称制約が解除されるのだろうか。またなぜ引用句には真性モダリティがないのだろうか。

- i. 柴田君は「家業を継ぎたい」と {言っている / 思っている}。

引用句を含む文全体の主語は3人称の「柴田君」である。しかし引用句は「(僕は) 家業を継ぎたい」であり、表現されていない主語は1人称である。したがって述語の人称制約は解除されているのではなく守られているので、例文 i. が文法的なのは当然である。

引用句「家業を継ぎたい」の表現されていない1人称は、例文 i. 全体の発話主体である1人称に包み込まれている。外側の1人称から見れば内側の1人称は他者、すなわち3人称であるため、助動詞「たい」が表す「意志」という真性モダリティの担い手となること

はできない。しかし同一の文内に二つの 1 人称が共在することがなぜ可能なのだろうか。

(24) 場の二重性

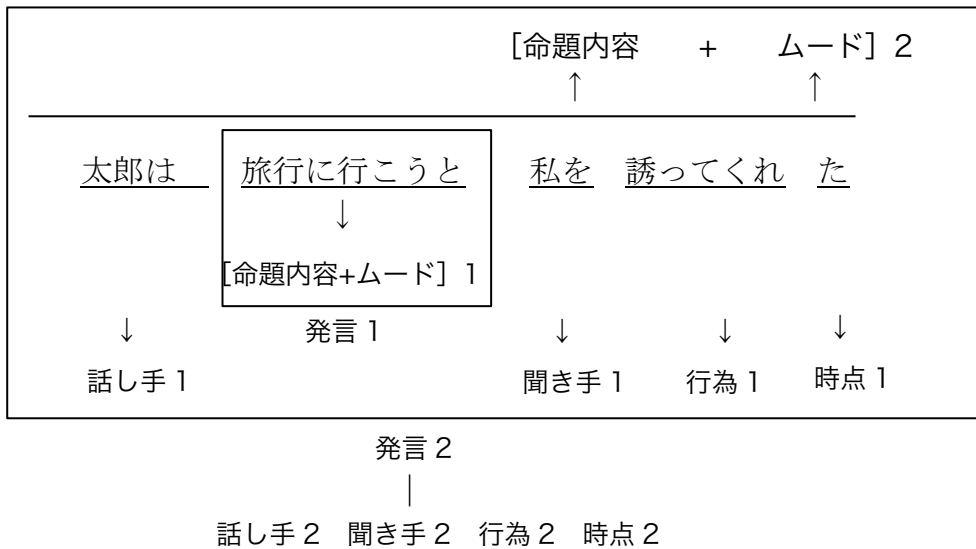
太郎が「旅行に行こう」と発言する。そしてそこに居合わせた花子が、後にその出来事を記述しようとして我々に次のような文を発したとする。

(1) 太郎は旅行に行こうと言った。

さて、(1)の文は、花子によるこの文の発言に先立って、太郎の発言が成立していることを表している。そして太郎の発言内容は、花子はその文を発言することによって聞き手である我々の前に再現される [引用者注] のである。つまり、ここには花子の発言が成立した時空間的場面があり、さらにそれとは別に太郎の発言が成立した時空間的場面が存在する。従って、花子が (1) の文を発した場面においては、その発言によってそれとは異なった場面における太郎の発言を再現したことになるわけである。(p. 15) (…)

従ってこれまでに挙げた用例は、太郎の発言の場と花子の発言の場という二つの場から成り立っており、しかも、花子の発言の場の中に太郎の発言の場を取り込むという入れ子型の二重構造を成していると言うことができる。

しかしながら、引用文そのものが発言される場と引用文によって再現されている発言の場とは、もとより同質の場ではあり得ないということも確認しておく必要がある。引用文が発言される場は現実の時間の流れの中に位置づけられるものであるが、引用文によって再現される発言の場は現実の時間とは切り離された、相対的な時間関係の中にしか位置づけられないものなのである。(p. 17)



(砂川有里子「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9, 1988)

【引用者注】

元の太郎の発言「旅行に行こう」は断定されて (asserted) いるが、花子の「太郎は旅行に行こうと言った」という発言に含まれている引用句「旅行に行こう」は「再現」されて (represented) いる。引用とは断定ではなく再現であることを砂川はよく理解していると思われるが、この論文ではこれ以上追求していない。

(25) 疑 問

ここで次のような疑問が湧くかもしれない。次の例のように出来事が起きている場と発話の場とが一致している「眼前描写文」には場の二重性がない。発話の場が出来事の場でもある。

- a. あ、太郎が走っている。
- b. Look. Taro is running.

しかし過去形や未来形で出来事が語られるときは、出来事が起きた（起きる）時空間と発話の時空間は異なるのだから、このときも二重の場があると言えるのではないか。二重の場はなにも直接話法の引用に限ったものではないのではないかという疑問が湧く。

- c. 太郎が昨日自転車を買った。
- d. Taro bought a bike yesterday.

【考 察】

たしかに例文 c. では「太郎が自転車を買った場所・時点」と、「話し手がその出来事を報告している場所・時点」とは異なるのだから二重の場がある。しかしこのような出来事報告文と引用句の本質的ちがいは、出来事報告文は話し手・聞き手を含む発話の場の二重性を持たないという点にある。砂川の言う引用句の二重の場は、発話主体としての 1 人称を含む発話の場が二重になっている点に特異性がある。

(26) 疑 問

- a. 柴田君は「家業を継ぎたい」と言っている。

例文 a. のような直接引用（直接話法）に発話の場の二重性があることは認めるとして、次の b. のような間接引用（間接話法）にも同じような場の二重性を認めるべきなのだろうか。

- b. 柴田君は家業を継ぎたいと言っている。

(27) 英語における話法

- a. 自由直接話法 Free direct speech
I'll come back here to see you again tomorrow.
- b. 直接話法 Direct speech
He said, "I'll come back here to see you again tomorrow."
- c. 自由間接話法 Free indirect speech
He would return there to see her again tomorrow.
- d. 間接話法 Indirect speech
He said that he would return there to see her the following day.
- e. まとめ引用 Narrative report of speech acts
He promised to visit her again.

(Leech, G. & M. H. Short, *Style in Fiction*, Longman, 1981)

(28) 日本語の話法

直接話法は、他人や自分の言葉を、何ら変えることなくそのまま直接引用するのを建前

とするが、日本語では必ずしもそのとおりではなく、引用者が適当にまとめた事柄・内容を引用する形になりやすく、直接話法と間接話法が混淆することがある。この傾向は話し言葉で特に顕著である。(小林芳男他編『日本語教育事典』大修館書店)

(29) 英語の直接話法と間接話法

英語では引用符の有無以外に直接話法から間接話法への転換で変化する文法項目がある。

a. 1・2 人称代名詞

Bill said, "I'll see *you* later."

→ Bill said that *he* would see *me* later.

b. 動詞の時制の一致 (sequence of tenses)

Bill said, "My brother *left* Japan."

→ Bill said that his brother *had left* Japan.

c. 直示的な時・場所表現

Bill said, "I'll be *here* tomorrow."

→ Bill said that he would be *there* the following day.

d. go, come などの方向性を持つ動詞

Bill said, "I'll *come* to Kyoto next month."

→ Bill said that he would *go* to Kyoto the following month.

【考察】

英語の話法転換で書き換えなくてはならない項目は、話し手・聞き手の発話の場 (hic et nunc) を入力とする関数的性格を持つ語で、Jakobson が「転換子」(shifters)と呼んだものである。意味論では「指標詞」(indexicals) と呼ばれる。

英語では発話の場に関係する指標詞は、話法を書き換えたとき原則としてすべて変換され、外側の発話の場 (=文全体の発話主体の場) に合わせる形で調整される。したがって、英語の場合、直接話法では砂川の言う二重の場が認められるが、間接話法では場の二重性が解消されて、一重になっていると考えられる。

(30) ところで先に、ある発言や思考の場とそれとは別の発言の場という二つの場によって構成されているのが引用文であると述べた。しかし直接引用と間接引用とではこの二重性のあり様は同じではない。直接引用の場合は元の発言や思考の場がかなり忠実に復元されなければならないのに対し、間接引用の場合は多かれ少なかれ、もとの発言や思考の場が引用を行う発言の場に引き寄せられた形に調整されなければならない。

(砂川有里子「引用と話法」、『講座日本語と日本語教育』第 4 巻、明治書院、1989)

(31) そのほかの [=時制以外の] ダイクシス表現は間接引用の場合になんらかの調整を受ける必要がある。

(43) a. 彼は「君にこれをあげるよ」と言った。

b. 彼は私にそれをくれると言った。

(44) a. 彼は「あした君のうちにいきたいんだ」と言った。

b. 彼は今日私のうちに来たいと言った。

(45) a. 彼は「この調子で頑張ればあしたは彼女に会いに行くことができる」と思った。

b. 彼はその調子で頑張れば今日私に会いに来ることができると思った。

以上の例に見られるように、述べたてや意志表明の文では人称代名詞、指示詞、時の副詞、ダイクシス動詞のすべてに対して場の調整が行われる。

しかし、命令、質問、依頼など、聞き手の行動を指示するタイプの文ではダイクシス表現がどれも同じように調整を受けるわけではない。(…)

(46) a. 父は「あいつに金を送ってやれ」と母に向かって言ったそうだ。

b. 父は俺に金を送ってやれと母に向かって言ったそうだ。

c. *父は俺に金を送ってくれと母に向かって言ったそうだ。

(…) 行為指示型の文の引用においては、引用句のダイクシス動詞の選択は元の発言の場で用いられた形式が優先され、引用の場に調整されることができないということが分かる。

(…) 命令文や質問文などの行為指示型の発言の場に対するダイクシス動詞の結び付きはそれだけ強力なものであるとすることができるだろう。

(32) 直接引用はあらゆる文を引用句に取ることができ、そのためモダリティー表現にも制約がない。それに対して間接引用の場合は引用句に現れるモダリティー表現にある程度の制約が認められるようである。

[以下は引用者によるまとめ]

「真偽判断の副詞」は間接引用に自由に現れる。

(53) a. 「犯人は十中八九その男にちがいない」

b. 彼は犯人は十中八九あなたにちがいないと思込んでいる。

命題内容の必要性、当為性に関する話し手の判断を表す文末形式も自由に現れる。

(55) a. 「その仕事はあなたがやらざるを得ませんよ」

b. 彼はその仕事は私がやらざるを得ないと言った。

「価値判断の副詞」も現れるが実際には多くない。直接引用の解釈が出るためである。

(58) a. 「山田君に会いに行ったのですが、あいにく彼は留守でした」

b. 彼は君に会いに行ったのだがあいにく君は留守だと言っていた。

「発語行為の副詞」「思考行為の副詞」も同様。

(59) a. それは率直に言って、あなたの考えが間違っているんですよ。

b. 彼はそれは率直に言って私の考えが間違っていると述べた。

(64) a. 察するに、あなたは何か誤解をしているようです。

b. 彼は察するに私は何か誤解をしているようだと言った。

[ここから砂川 1989 からの引用]

聞き手めあてという伝達的機能が強くなればなるほど、そのモダリティー表現は間接引用句の中に収まり切れなくなってくるわけである。(…)

日本語の間接引用句が英語よりはるかに広い範囲のモダリティー表現を取り込み得ることは以上のことから明らかだろう。このことは、日本語の場合、間接引用文がある種の調整を受けることになるとはいえ、かなり完全に近い形で場の二重性が保持されているとい

うことの現れであると思われるのである。(砂川 1989)

(33) 英語の間接引用句には “probably”などの「真偽判断の副詞」は収まるが “frankly”などの「発語行為の副詞」は収まらないことが知られている。

(65) John says that the new is probably true.

(66) a. John said that frankly, Mary was lying.

b. John said frankly that Mary was lying.

(66) a.の “frankly”は、一見引用句の中に収まっているように見えるが、これは元の発話主体である John の発話態度を表しているのではなく、この文全体の話し手の発話態度を表しているのであって、この文全体の話し手が自らの発話態度を示すために挿入的に用いたものであると言える。John の発話態度を表すには(66) b.の文を用いることができるが、ここでの副詞は引用句の外にあることから明らかなように John の発言を再現したのではなく、この文全体の話し手が John の発話態度を自ら描写したものである。いずれにしても “Frankly, Mary is lying.”などの発言に見られる発語行為副詞が間接引用句の中に収まり得ないことは明らかである。

さらに英語では間接引用句の that 節に命令文を用いることは許されない。

(67) *He told me that go.

また質問文もそのままの形では収まらず、語順を変えて if や whether 節の中で用いられることになるが、その場合、元の質問文にあった問い掛けのモダリティーは失われることになる。

(68) a. *He asked me that could I come to the party today.

b. He asked me if I could come to the party today.

対するに日本語では、全く元の語順のままで間接引用句に用いることができる。

(69) a. 彼は「あしたパーティーに来られますか」と聞いた。

b. 彼は今日パーティーに来られるかと聞いた。 (砂川 ibid.)

注) 英語の間接話法内での副詞の使用の可否については次の文献を参照のこと。

廣瀬幸生「言語表現のレベルと話法」『日本語学』7-9, 1988

【考察】

直接話法と間接話法がはっきりと分かれている英語やフランス語では、直接話法では場の二重性があるが、間接話法では調整の結果、場は一重化していると考えられる。

ところが直接話法と間接話法の区別が明確でない日本語では、砂川が述べているように、間接話法においても場の二重性が強く残る。英語では他者の発言は、いわば消化吸収されて自分（伝達者）の血肉となるのだが、日本語では他者の発言は、いつまでも消化吸収されない異物として残るかのようである。

6. 福沢将樹の引用論

ここでは福沢将樹『ナラトロジーの言語学 — 表現主体の多層性』ひつじ書房、2015. の主な主張を概観する。

(34) 表現主体の多層性を構成する要素

- a. 文の語り手：文を言語記号の配列として完成する主体。作者を除けば最上位に位置し、小説などの語り (narrative) では物語世界の外または内にいる語り手 (narrator)。
- b. 知情意の視点：〈言及対象〉たる物事を知覚し、或いは〈言及対象〉たる情意の担い手となって〈言及対象〉を命題として構成する主体。語りにおいては作中の登場人物の視点がこれに相当する。最下層に位置する。

例：「この部屋は広いね」

「この部屋」を言及対象とし、その対象の「広い」という属性を知覚して命題を構成している。知情意の視点はこの部屋について「広い」と感じた主体である。

- c. 判断の視点：命題に対して推量・断言等の判断の担い手となる主体。判断の視点は認識的モダリティを担う。

例：「麻由子は病気かもしれないよ」

「麻由子」を言及対象とし、その対象について「病気である」という可能性があるという認識的モダリティを付与している。

〈判断の視点〉を担うのは語りにおいては登場人物のこともあり、また地の文で「麻由子は病気なのかもしれないなかった」とあれば、担うのは語り手である。

- d. 文型の視点：〈判断の視点〉以下の〈視点〉の担い手が自分と〈同一人格〉であるか〈別人格〉であるか、及び〈同一人物〉であるか〈別人〉であるかに関して〈人格〉・〈人物〉の〈視点〉を統合し、文型を統合する主体。

(35) 直接引用と間接引用の多層性の図式

- a. 非引用 (=自由直接話法)

松島：「明日にでも提出したいのですが」

文の語り手—文型の視点—判断の視点—知情意の視点

- i) 〈知情意の視点〉：「～したい」という意志モダリティの主体 (=松島)
- ii) 〈判断の視点〉：「～したいのですが」という言いさし文による控えめな断定という認識モダリティの主体 (=松島)
- iii) 〈文型の視点〉：〈判断の視点〉以下を同一人格とし、「明日にでも提出したいのですが」という表出文にまとめる主体 (=松島)
- iv) 〈文の語り手〉：iii) に同じ。

非引用では〈知情意の視点〉、〈判断の視点〉、〈文型の視点〉、〈文の語り手〉は同一人格であり、砂川の言う場の二重性はなく、文は真性モダリティを持つ。

- b. 直接引用 (=直接話法)

昨日松島君は僕に「明日にでも提出したいのですが」と言っていた。

文の語り手

文型の視点—判断の視点—知情意の視点

- i) 〈知情意の視点〉：「～したい」が表す意志モダリティの主体 (=松島)
- ii) 〈判断の視点〉：「～したいのですが」という言いさし文が表す控えめな断定という認識モダリティの主体 (=松島)
- iii) 〈文型の視点〉：〈判断の視点〉以下を同一人格とし、「明日にでも提出したいのですが」という表出文にまとめる主体 (=松島)
- iv) 〈文の語り手〉：引用句を直接引用した主体

このとき砂川の言う場の二重性が生じる。上記 i) ii) iii) は元発話の行われた〈場 1〉に帰属し、iv) のみ文全体の発話が行われた〈場 2〉に帰属する。元発話の 1 人称は、文全体の発話の〈場 2〉に吸収され、引用句は真性モダリティを持たない。

c. 間接引用 (=間接話法)

昨日松島君は僕に今日にでも提出したいと言っていた。

文の語り手—文型の視点

判断の視点—知情意の視点

- i) 〈知情意の視点〉：「～したい」が表す意志モダリティの主体 (=松島)
- ii) 〈判断の視点〉：「～したい」の表す断定という認識モダリティの主体 (=松島)
- iii) 〈文型の視点〉：〈判断の視点〉以下を別人格とし、元発話を間接引用としてまとめ直す主体 (=伝達者)
- iv) 〈文の語り手〉：文全体の話し手

このとき i) と ii) は元発話の〈場 1〉に帰属し、iii) と iv) は文全体の発話の〈場 2〉に帰属する。場の二重性が認められ、引用句は真性モダリティを持たない。時間副詞「明日」は〈場 2〉に調整されて「今日」に変わる。

d. あらすじ引用

昨日松島君はすぐに提出したがっていた。

文の語り手—文型の視点—判断の視点

知情意の視点

- i) 〈知情意の視点〉：元発話の「～したい」が表す意志モダリティの主体 (=松島)
- ii) 〈判断の視点〉：元発話の「～したい」が表す意志モダリティは、「～したがっている」という認識モダリティに変換されている。「～したがっている」という判断の主体は文全体の話し手である。

iii) 〈文型の視点〉：〈知情意の視点〉と〈判断の視点〉が別人格であることを認定し、ふたつの人格を統合して「すぐに提出したがっていた」という文にまとめる視点。

iv) 〈文の語り手〉：文全体の発話者。

ここには場の二重性はなく、全体が〈場 2〉における出来事報告文になっている。
〈知情意の視点〉は松島に帰属するが、その意志が「したがる」という外的描写表現に変換されていて、もはや松島は意志の 1 人称的主体ではない。

7. 外国人の日本語学習者の引用ストラテジー再び

(36) [= (3 a)] (カンタス航空の) 切符の reservations の女の人は京大で経済を勉強しました。でも、私は彼女にあなたは後で Qantas の経済かん、経済課で働くつもりですか、あ、彼女はいいえと言った。あ、これは私の仕事です。あ、たぶん、あとで結婚しましょう。

【問 題】

日本語母語話者が他人の発言を引用するときは、次の a. のように発言者と発言動詞を付け加えるのがふつうである。

a. 「これは私の仕事です」と彼女は言いました。

どうして外国人の日本語学習者は発言者と発言動詞を省略して他人の発言を自分の談話の中に直接引用するのだろうか。また日本語母語話者はなぜこのような引用の仕方に違和感を感じるのだろうか。

(37) 英語における他者の発言の引用

so we're stauning (i.e. standing), looking at this, wen this wuman come along and said, what were we looking for, and we're looking for somewhaur to stay the night, 'Where do you come fae?' 'Scotland', 'You're no feart of coming here withoot somewhere to saty', so she gi'en us half a dozen addresses. (Clark, Herbert H. & Richard J. Gerrig, "Quotations as demonstratives", *Language* 66(4), 1990)

そこで、まあ、つつ立ってて、この、まあ、見てると、ある婦人がやってきて、何か探してはるのんかって、どこか泊まるとこ探しているんやってと、「どこから来はったん」(言うて)「スコットランド」(っちゅうと)、「泊まるとこもないのにやって来るなんてえらい度胸がありますねんね」(って)、それで住所を 6 つばかりもくれはったってこと。

注：原文はスコットランド訛りなので、標準英語とは綴りがちがう。また日本語訳はそれを関西弁に見立てた鎌田の訳

(鎌田修『日本語の引用』ひつじ書房、2000)

英語では“Where do you come from?” “Scotland”のように、発言者と発言動詞を明示せず
に他者の発言を引用することがふつうに行われている。鎌田の説は、英語の引用ストラテ
ジーが学習者の日本語にそのまま持ち込まれているというものである。

(38) [太郎と母親がテレビを見ている。そこに太郎の妹の花子から電話がかかってくる。電話を切った後のやりとり]

a. Mother : What was that?

Taro : (i) It was form Hanako. She said she is coming home tomorrow.

(ii) It was form Hanako. She is coming home tomorrow.

b. 母 : 何だったの ?

太郎 : (i) 花子だったよ。明日、花子が帰ってくる {って / そうだよ / らしいよ}。

(ii) 花子だったよ。??明日、花子が帰ってくるよ。

(鎌田 同書)

(39) a. According to the New York Times, President Clinton decided to come to Japan next month.

b. ニューヨークタイムズによれば、クリントン大統領は来月日本を訪問することに

i) ??決めました。

ii) 決めたということです。

(鎌田 同書)

(40) [太郎は父親に叱られてしょげている]

a. A friend : What did he say?

Taro : I was lazy.

b. 友達 : お父さんに何て言われたの。

太郎 : i) 僕は怠けてるって。

ii) ??僕は怠けてる。

(鎌田 同書)

【考 察】

他者の発言を自分の談話に引用するとき、英語と日本語とでは引用のストラテジーが異なる。英語では発話者や発話動詞を付けず、また引用標識を用いずに引用することがある。日本語では引用標識を用い、発話者や発言動詞もできる限り付加する必要がある。鎌田はこの違いを、情報のなわ張り理論で説明できるとしている。

8. 情報のなわ張り理論

情報のなわ張り理論は、心理学者の神尾昭雄が『情報のなわ張り理論』大修館書店、1990で提唱した、情報の帰属と用いられる語形の関連に関する理論である。以下、その概要を見る。

(41) 観察

登場人物 : ある会社の専務 P、P の秘書 R、別の会社の人 Q

場面 : P の部屋を Q が訪問して何事か話している。そこに R が入って来て P に次のように告げる。Q もこれを耳にする。

a. 専務、3時から会議でございます。

そろそろ3時が近づいて来たため Q は辞去しようとして、その理由を述べる。

b. 専務は3時から会議があるようですね。

c. 専務は3時から会議があるんじゃないですか?

d. 専務は3時から会議があるらしいですね。

e. *専務は3時から会議があります。

f. ??専務は3時から会議がありますから。

「専務は 3 時から会議がある」という情報は、少し前に Q が R から取得したものであり、Q は事実であることを知っている。なぜ Q は事実を e. や f. のように直接的な断定表現を用いて言うことができないのだろうか。

(42) 情報のなわ張り理論の仮説

- a. 話し手または聞き手と文の表す情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は〈近〉および〈遠〉の 2 つの目盛りによって測定される。
- b. 〈X の情報のなわ張り〉とは、上記の規定によって X に〈近〉とされる情報の集合である。ここで X は話し手または聞き手とする。

(43) 話し手にとって〈近〉となる情報

- a. 話し手自身が直接体験によって得た情報
- b. 話し手自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表す情報
- c. 話し手自身の確定している行動予定および計画などについての情報
- d. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表す情報
- e. 話し手自身の近親者またはごく身近な人物の確定している重要な行動予定、計画などについての情報
- f. 話し手自身の職業的あるいは専門領域における基本的情報
- g. 話し手自身が深い地理的関係を持つ場所についての情報
- h. その他、話し手自身に何らかの深い関わりをもつ情報

(44) 直接形と間接形

- a. 直接形：確定的な断言の言い切りを持つ文
 - i) 今日はよい天気です。
 - ii) 昨日は 11 キロも歩きました。
 - iii) 吉田君が夕べ家にやって来たよ。
 - iv) 我が軍は断固として屈しない。
- b. 間接形：断言を避けた不確定な文形
 - i) あの人、どこか悪いみたい。
 - ii) 彼女は多分来るだろう。
 - iii) 明日は晴れるんじゃないの。
 - iv) 蔵相の辞任は時間の問題と思われます。

(45) 情報のなわ張りとは直接形・間接形の相関関係

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

(46) 情報が話し手のなわ張りに属するとき直接形を用いる。表の (A)に当たる。

- a. 昨日は動物園に行ってきました。
- b. 私、頭が痛い。
- c. 主人は来月 1 日にアメリカに発ちます。
- d. 京都の人口は 150 万人くらいですよ。
- e. ??昨日動物園に行ってきたらしい。
- f. ??私、頭が痛いようよ。

(47) 考えられる反例

- a. [夢遊病の人が] ゆうべ夜中に近所を歩いていたららしい。
- b. 私、頭が変になったみたい。
- c. [診察に来て] 先生、どうも風邪を引いたららしいのですが。
- d. [税理士に] 最近うちの会社の財務状態はどうもよくないようなんだ。

これは見かけの反例である。a. b. では話し手が自分の意識・判断に自信がもてなくなり、自己を他者であるかのように見なしているの、自分に帰属する情報も自分には帰属しないかのように振る舞っている。また c. d. では、相手が医師・税理士という専門性の高い職種で、発話内容が相手の専門領域に属することなので、話し手は断定を避けている。

(48) 情報が話し手と聞き手の両方のなわ張りに属するとき直接ね形を用いる。表の(B)

- a. いい天気ですね。
- b. 君はドイツ語がずいぶんうまいね。
- c. お父さんが亡くなられたのはおととしでしたね。
- d. おまえ、近頃少し太ったな。

(49) 次のように終助詞「ね」を省くと容認されない。

- a. *いい天気です。
- b. ??君はドイツ語がずいぶんうまい。
- c. *お父さんが亡くなられたのはおととしでした。
- d. *おまえ、近頃少し太った。

(50) 情報が聞き手のなわ張りのみに属するとき間接ね形を用いる。表の(C)に当たる。

- a. 君は退屈そうだね。
- b. パリの冬は寒いらしいね。
- c. お姉さん、結婚したそうだね。

d. 課長、来週出張のようですね。

(51) 情報が話し手のなわ張りにも聞き手のなわ張りにも属さないときは間接形を用いる。表の (D)に当たる。

- a. 明日も暑いららしいよ。(推量)
- b. 吉田君はもう退院したんじゃない。(確認)
- c. アラスカの自然はすばらしいって。(伝聞)
- d. 夏子さんもそろそろお嫁に行くだろう。(予測)

(52) 英語と日本語のなわ張りのちがい

情報のなわ張り理論の仮説 (42)は英語でも日本語でも同様に成り立つ。また表 (45)の A から D までの場合があることも同様である。ただし、英語と日本語にはふたつの重要な相違がある。

- a. 具体的な直接、間接両文形を成す表現が全く異なっている。
- b. 英語での両文形の機能は、日本語の対応文形に比べて、広範であり、それぞれ直接ね形および間接ね形の機能を含む。したがって、直接ね形および間接ね形は英語に存在しない。

英語では、情報が話し手のなわ張りに属していれば、聞き手のなわ張りに属するか否かにかかわらず、常に直接形が用いられる。一方、情報が話し手のなわ張りに属していなければ、やはり聞き手のなわ張りに属するか否かにかかわらず、常に間接形が用いられる。つまり英語は、情報の聞き手のなわ張りへの帰属状態に無関心な言語である。

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接形	C 間接形

(53) A の場合は直接形を用いる。

- a. I feel lonely.
- b. I'm in my office this afternoon.
- c. My son is getting married next month.
- d. The population of this village is about 3,000.

(54) B の場合も直接形を用いる。

- a. It's a beautiful day.
- b. You've taken good care of me.
- c. George was just released from the hospital.
- d. Your home is very close to the campus.

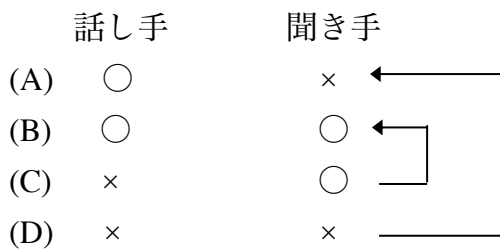
(55) C の場合は次のような間接形を用いる。

- a. You seem to have forgotten that. (緩和表現 seem)
- b. I hear your son is a medical student at Harvard. (伝聞表現 I hear)
- c. Isn't you mother from California? (否定疑問)
- d. It looks like the procedure is very complex. (緩和表現 look like)

(56) D の場合も次のような間接形を用いる。

- a. I hear winter in Quebec is hard. (伝聞表現 I hear)
- b. I think this picture is good. (断定回避 I think)
- c. Your dream may come true. (可能性の may)
- d. Jane looked like she was feeling bad. (緩和表現 look like)

(57) 日本語と英語のなわ張り管理のちがい



日本語と英語のなわ張りにかかる談話ストラテジーでは、(C)から (B)への移行と、(D)から(A)への移行に差が出る。英語では新しい情報を獲得すると、(C) → (B)、(D) → (A)の状態変化はただちに起こり、直接形を用いるのがふつうである。しかし日本語ではこの状態変化はただちには起こらない。

(58) 新規獲得情報 (Newly Learned Information)

例 (41)で見たように、秘書から会議があることを聞いた客が、その情報を直接形で表現することができないのはなぜか。

- a. ??専務さんは3時から会議がありますから、これで失礼します。
- b. 専務さんは3時から会議がある{ようです / そうです}から、これで失礼します。

情報のなわ張り理論では、自分が前から持っていた情報と、その場で得た情報とは区別されなければならないとされる。前から持っていた情報は「既獲得情報」(Already Learned Information)、その場で得た情報は「新規獲得情報」(Newly Learned Information)と呼ぶ。既獲得情報は自分の情報のなわ張りに属するので、直接形で断定することができる。

- c. 知ってるかい。柴田君ってアメリカで生まれたんだよ。

日本語の談話ストラテジーには次のような格率があるとされる。

新規獲得情報についての格率

新規獲得情報を自分の情報のなわ張りに属するものとして扱ってはならない。

つまり日本語では、その場で得た情報をすぐに自分のなわ張りに属するものとみなすことができないということである。上の表で(C) → (B)、(D) → (A)の移行はすぐには起きない。このために少し前に秘書から聞いた「専務は3時から会議がある」という情報を直接形で言うことができず、まだ自分のなわ張りには属していないものとして間接形で言わな

くてはならない。

(59) a. Mother : What was that?

Taro : (i) It was form Hanako. She said she is coming home tomorrow.

(ii) It was form Hanako. She is coming home tomorrow.

b. 母 : 何だったの?

太郎 : (i) 花子だったよ。明日、花子が帰ってくる {って / そうだよ / らしいよ}。

(ii) 花子だったよ。??明日、花子が帰ってくるよ。

「明日花子が帰って来る」は太郎にとって新規獲得情報なので、「そうだ」「らしい」など推量・不確実を表す間接形を用いるか、「って」という引用標識を用いなくてはならない。英語では a. (ii)のように直接形を用いることができる。

(60) a. According to the New York Times, President Clinton decided to come to Japan next month.

b. ニューヨークタイムズによれば、クリントン大統領は来月日本を訪問することに {??決めました / 決めたとのことです。}

英語には新規獲得情報の扱いに関する格率がなく、新規獲得情報はすぐに自分のなわ張りに属するものとしてよい。このため英語では新聞報道などに言及するとき直接形を用いることができるが、日本語では伝聞表現などの間接形を用いなくてはならない。

(61) 知識情報の染み込み理論

この節では、知識と体験が染み込み速度においても異なるということを示す。ここで「染み込み速度」(speed of ingraining)とは、新しく獲得された情報が既存の知識と結びつき完全に理解されること(これを「染み込み」と呼ぶ)の速度を指す。知識の染み込みは遅く、日本語の会話においては染み込み過程の身体化(embodiment)が高度に要求される。他方、体験の染み込み速度は速く、即時的に染み込みが完結する。(…)

「なら」は条件の表現で、当該の情報が事実か否か不確かであることを表す。それに加えて、「なら」は当該の情報が新しく獲得されたばかりであることを表すこともある。たとえば、次の文(14)における「なら」は、条件の意味と新規獲得の意味という2つの意味を併せ持ち、この文を曖昧にしている。

(14) 彼が来たなら私は帰る。

(…) このように、条件と新規獲得の意味を併せ持つ言語表現があるということは、人間にとって条件と新規獲得の意味が近いということを示している。(…) つまり、事実として新規獲得された情報は、事実か否か不確かな情報に近いということで、これは情報の染み込み速度が遅いということである。

(定延利之「推論利用可能性と染み込み速度に関する知識と体験の異なり」『電子情報通信学会信学技報』vol. 113, no. 354, 2013)

東郷注) 新規獲得情報と条件文の関係については次の文献を参照のこと。

Akatsuka, Noriko, "Conditionals and epistemic scale", *Language* 61, 1985.

(62) 再び外国人の日本語学習者の引用ストラテジーについて

[=(3 a)] (カンタス航空の) 切符の reservations の女の人は京大で経済を勉強しました。でも、私は彼女にあなたは後で Qantas の経済かん、経済課で働くつもりですか、あ、彼女はいいえと言った。あ、これは私の仕事です。あ、たぶん、あとで結婚しましょう。

【考 察】

鎌田は情報のなわ張り理論を援用して、上のように引用標識も発言者も明示せず他者の発言を自分の談話に持ち込むのは、英語などの母語の談話ストラテジーをそのまま日本語に適用しているからだとして説明している。(59)(60)はこの仮説で説明できる。しかし(62)の、「これは私の仕事です」「たぶん、あとで結婚しましょう」という他者の発言は、ごく最近に得た新規獲得情報ではなく、話し手が過去に接した情報、つまり既獲得情報である。獲得時から時間が経過しているため、既に話し手のなわ張りに属していると見なすことができ、直接形で表現できるはずだが、実際は日本語では不自然になる。(59)(60)は「新規獲得情報の処理に関する談話的ストラテジーの日英差」で説明できるが、(62)は説明できないまま残る。日本語では他者の発言は、いつまで経っても自分の情報のなわ張りに属することがないのだろうか。他者の発言は、「いつまでも消化吸収することができない異物」、「どうやっても解凍することができない冷凍食品」なのだろうか。もしそうだとするならば、それはいかなる理由によるのだろうか。

9. 括弧とパースペクティブ・シフト

(63) さまざまな括弧 (引用符) の用法

- a. 美智子は「明日には桜も満開になるでしょう」と静かな声で言った。
- b. それでもみんなはすごい剣幕で激論していて、なんだかおかしかった。まるでNHKの「真剣 10 代しゃべり場」だ。(柘野浩一『ショート・ソング』)
- c. 「ナローケーズ」という名前のその喫茶店はサーティーワンの二階にあり、ガラス張りになっていて吉祥寺駅前雑踏がよく見えた。(同書)
- d. セネカに「人生の短さについて」という短編があります。この章では人生の「短さ」についてさらに考えてみましょう。

(中島義道『「時間」を哲学する』講談社現代新書)

- e. 他の世界の住人にとっては、その世界が「現実世界」であり、他の時点にいるものにとっては、その時点が「今」であり、他の身体心理連続体に内属する者にとっては、そいつが「私」であるとしても、端的な現実世界は、端的な今は、端的な私は、ただひとつここにしかない。(永井均『私・今・そして神』講談社現代新書)
- f. 大学院生にもなって唯々諾々と指導教員の言うなりになっている奴は「白い巨塔」の一員になるのが落ちだ。大学院などさっさと辞めちまえ。

(石原千秋『大学生の論文執筆法』ちくま新書)

- g. 「男は男らしく、女は女らしく」あることで、男性はある面で得をし、ある面では損をしている。女性も同様で、「男は男らしく、女は女らしく」あることで、ある面

で得をし、ある面では損をしているというのが、実態だろう。(同書)

- h. 80 年代、最初に話題になったファッションといえば「カラス族」だろう。81 年、コム・デ・ギャルソンの川久保玲、ワイズの山本耀司のパリ・デビューによって、「黒ずくめでアシンメトリーなボロルック」が、「おしゃれな格好」となったのである。

(荷宮和子『なぜフェミニズムは没落したのか』中公新書ラクレ)

- i. そもそもの楽曲の要請からすると、「ラ」と「#ソ」とを行き来するはずの「ちょーとおっさんこれなんぼ」を長 2 度の音程で歌うことで、和声短音階の気取った感じをぬぐい去る。このナチュラル化(ソについての#を取って「自然」に戻すこと)によって、日本の土俗の音を復権させているわけです。

(佐藤良明『J-POP 進化論』平凡社新書)

(64) 括弧の機能

- a. 他者の発言を引用する：異なる〈声〉の表示

歌人の笹伊藤冬井である。ササイトウ・トウイと読む。どこまでが名字なんだ！と腹が立ってしょうがない、人をなめきった名前だが、
「これ本名なんですわ」本人はしれっと言い張っている。

(柘野浩一『ショート・ソング』)

- b. 固有名を他から区別する：名と名でないものの差異化

i) 駅から少しあいたところに「オリーブの木」というパン屋さんがあって、そこに伊賀さんはずんずん入っていった。

(柘野浩一『ショート・ソング』)

ii) 翌日、九月二十一日の歌には、河野の第八歌集『家』(短歌研究社)が届いたことが記され…

(永田和宏『歌に私は泣くだらう』)

- c. わかりにくい用語の解説・翻訳

乳癌の疑いがかかなり強い、形成外科の領域ではないので、乳腺外科の稲本俊先生にまわし、そこでエコーとバイオプシー(生体組織診断)を行ったという。(同書)

- d. 本文から横道に逸れる解説やつぶやき：同じ声でもトーンが異なる

四十代半ば(長期ローンの返済にはぎりぎりの年齢)にして一国一城の主となった。十数年前に、二十一畳の地下室つき建て売り住宅を購入したのである。

これでしばらく蔵書の悩みはなくなると思った。誰もがうらやむ読書環境を手に入れたし、これからは本で苦しむこともない、とっていた(もっとも、大変な借金を背負うことになったのだが。)

(岡崎武志『蔵書の苦しみ』)

- e. メタ言語的用法

各自が「私は～」と語りながら、われわれはそう語る人(発話者)がそれぞれ異なっていることを知っている。つまり、「私」は「デカルト」とか「カント」とか「フッサール」のように、特定の人を指示している名前ではないことを知っている。では、なぜわれわれは個々の人がこの同じ「私」という言葉を使用しながら、お互いに的確に区別できるのでしょうか。(中島義道『「私」の秘密』講談社学術文庫)

- f. 「いわゆる」用法

漏らしたものがあまりに大きな、ザルで水をすくったような話でしたが、とにかくこの章では、伝統的な日本のうた—そこにこもる哀しみ、詠嘆、喜び、弾み—が、文化的覇権者である西洋の“すぐれた、うた心との接触によって徐々に軸を動かしてきた過程を追ってきました。(佐藤良明『J-POP 進化論』平凡社新書)

【考 察】

括弧は、その中身が周囲の本文と何らかの意味で質的に異なる“島”であることを表示する。他者の発言の直接引用はその典型で、「」の中身は本文を書いている著者とは別の人の発言である。このため「」の中身は真性モダリティを持たない。

括弧と周囲の本文との質的差異は多岐にわたる。名と名でないもの（固有名詞と普通名詞）、専門的用語とその解説、外国語とその翻訳、本文と横道、言語の普通の用法とメタ言語的用法、等々、このうち特に注目されるのは f. の「いわゆる用法」である。

(65) 「いわゆる」用法：真性モダリティの放棄

上の例 f. の「文化的覇権者である西洋の“すぐれた、うた心」で、“すぐれた”に引用符が付いているのは、著者である佐藤良明が「西洋のうた心が日本のうた心に較べて優れている」と信じていないからである。ここでは引用符が「すぐれた」に真性モダリティがないことを表示している。

(66) 「いわゆる」の語源

動詞「言う」の未然形に上代の受身の助動詞「ゆ」の連体形がついて一語化したもの。

- ① 世間一般にいわれている、また、一般にそうたとえられている
- ② すでに周知の、言うまでもない (『日本国語大辞典』小学館)

【用例】

あまり知られていないかもしれませんが、弊社の販売比率は海外が 80%以上を占めており、諸外国にビジネスの比重が大きく傾いています。フランスのルノーと提携し、取締役の 25%は外国人で、1 名でも外国籍のメンバーが加わると社内会議も英語で行います。社員に対しても必然的にワールドワイドなビジネスに対応できる人、いわゆる「グローバル人材」を求めています。(日産自動車株式会社ホームページ)

(67) パースペクティブ・シフト

発話 / 文を適切に理解するためには、少なくとも、1つの文の中では一定のパースペクティブが保持されて、異なるパースペクティブの混在やシフトが生じないという〈パースペクティブの一貫性〉が強く求められることになる。パースペクティブは話者以外にも多様な要素によって構成されている。ここでは、パースペクティブを「(パースペクティブ保持者の) 語彙、思考、知識、感情、知覚、および空間 — 位置を含む」概念として捉えよう。(…) 異なるパースペクティブの混在やシフトは原則的であってはならないとされるものである。しかし、自然言語には、1つの文に異なるパースペクティブが混在していたり、文の途中でパースペクティブがシフトしたりする例が、信念文以外にもたくさん存在する。(…)

- (10) 首相が“コントロールされている”と確言した汚染水

注) 安倍首相は 2013 年 9 月 7 日、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで開催された国際オリンピック委員会 (IOC) 第 125 回総会において、福島第 1 原発の汚染水について「under control」と発言した。

例えば(10)では、引用符(“ ”)が、当該記述“コントロールされている”に関する主語「首相」のパースペクティブには含まれない「コントロールされていない」、あるいは、少なくとも「コントロールされている」に疑念を抱く現行の発話行為の話者 / 著者のパースペクティブを挿入する役割を担っている。

(山森良枝『パースペクティブ・シフトと混合話法』ひつじ書房、2015)

【解 説】

例 (10)の“コントロールされている”の引用符は、単に中身が首相の発言であることを示すためのものではない。「首相がコントロールされていると確言した汚染水」のように引用符がなければ、単に首相の発言を間接引用しただけで、この文章の書き手が首相の発言を信じているか否かに関しては中立的で、特別なニュアンスは生じない。ところが例のように引用符で括ると、書き手は首相の発言を信じていない、もしくは強く疑っているというニュアンスが生じる。「いわゆる用法」では、「自分が言ったことではない」「世間一般で言われていることだ」ということを括弧が示していたが、例 (10)の用法はそれを一歩先に推し進めて、「引用符の中身にコミットしない」「引用符の中身が真であると信じていない」という書き手の命題態度 (propositional attitude) を表示する機能を担っている。山森はそれを「異なるパースペクティブの挿入」と見なしている。

(68) 語用論的括弧

従って、括弧には少なくとも 2 種類の括弧があることが分かる。(括弧の中身を他と区別するために使用される点では同じだが)、1 つは、パースペクティブや文脈をシフトせず、字義通りの解釈を与える括弧である。

今 1 つは、パースペクティブや文脈をシフトし、括弧の中身の解釈に影響を与える括弧である。ここでは、前者を「統語論的括弧」、後者を「語用論的括弧」と呼ぼう。

(山森 同書)

(69) 語用論的括弧の談話機能

先程の (26) [=首相が“コントロールされている”と確言した汚染水] のような例では、被引用句の真理条件が、パースペクティブ・シフトを介して逆転した。このことは、見方を変えれば、シフトによって新たに導入されるパースペクティブ — 「焦点領域」 — は (シフト以前の) 現行のパースペクティブの背景 (以下では、「Common Ground」と呼ぶ) に含まれていないパースペクティブであることを意味している。従って、被引用句の解釈や真理条件が依存するパースペクティブを現行のパースペクティブから焦点領域のパースペクティブにシフトする語用論的括弧の機能について次のように述べることができるだろう。

(40) 語用論的括弧は、焦点領域のパースペクティブを Common Ground に付加する機能を持つ。

(…) 語用論的括弧の手続き的意味の第二条件として次のような処理条件を示すことがで

きる。

(41) 語用論的括弧の中身は、焦点領域のパーспекティブに基づいて処理されなければならない。

(…) そこで、語用論的括弧のこのような文脈効果を手続き的意味の第四の条件として示すと次のようになる。

(49) 語用論的括弧は、現行のパーспекティブの対比パーспекティブを焦点領域のパーспекティブとして想起することを受け手に要求する。 (山森、同書)
原注) Common Ground は、”the set of speaker’s presuppositions”とも言われ、Stalnaker (1978) によれば、その真理条件が当該会話の背景の部分として捉えられる命題の集合にあたる、と言う。具体的には、会話の参与者に共有されている “mutual knowledge / common knowledge” に対応すると考えられている。

N. B. Stalnaker, Robert, C., “Assertion”, Peter Cole (ed.) *Pragmatics (Syntax & Semantics 9)*, Academic Press, 1978.

10. 命題態度と信念の文脈

山森がパーспекティブ・シフトと呼んだ現象とよく似たものは、伝統的な意味論、特に分析哲学の指示理論 (reference theory) においても知られていた。ここでは分析哲学における取り扱いを見てみよう。

(70) ライプニッツの法則

命題中に含まれた指示表現を、等しい外延を持つ別の指示表現と置き換えても、命題の真偽値は変わらない

(71) ライプニッツの法則が成り立つ例

a. *Barack Obama* was born in 1961.

b. *The present President of the United States* was born in 1961.

→ Barack Obama = the present President of the United States

ライプニッツの法則が成り立つ文脈を透明な文脈 (transparent context) という

(72) ライプニッツの法則が成り立たない古典的な例

a. Phosphorus is Hesperus.

b. 明けの明星は宵の明星だ。

Phosphorus = Hesperus なので入れ替えると同語反復になってしまう。

c. Phosphorus is Phosphorus.

d. Hesperus is Hesperus.

同語反復文は恒真文なのでよいとして、Jack doesn’t know という主節に埋め込むとおかしなことになる。e. は単にジャックの無知を意味するだけだが、f. はジャックが同一律を理解していないことになる。

e. Jack doesn’t know that Phosphorus is Hesperus.

f. Jack doesn't know that Hesperus is Hesperus.

(73) ライプニッツの法則が成り立たない文脈を不透明な文脈 (opaque context) と呼ぶ。名付けたのは W.V.O. Quine である。(Word and Object, M.I.T. Press, 1960)

a. モーダル文脈 modal context

i) Yuri Gagarin might not have been *the first man in space*.

ii) Yuri Gagarin might not have been *Yuri Gagarin*.

注) Yuri Gagarin : 1961 年に宇宙船ボストーク号で史上初の宇宙飛行に成功したソ連軍兵士。地球に帰還後、「地球は青かった」との名言を残す。

b. 命題態度動詞 propositional attitude verbs (think, believe, know, etc.)

これらの動詞が作る文脈を「信念の文脈」(belief context) と呼ぶこともある。

i) Ralph believes that *the man he saw* is a spy.

ii) Ralph believes that *Ortcutt* is a spy.

(74) 事象様相 de re / 言表様相 de dicto

re はラテン語で「物」、de re は「物の」、dicto はラテン語で「言われた (said)」、de dicto は「言われたことの」を意味する。誰かの信念や発言に言及するとき、その信念や元発話をそのままの言語形式を用いて言及するとき言表様相という。

a. John said, "I met the first man in space".

b. John said that he had met *the first man in space*.

これにたいして他者の信念や元発話を、事実（と話し手が信じている世界）に基づいて別な表現で置き換えた場合、それを事象様相という。

c. John said, "I met the first man in space".

d. John said that he had met *Yuri Gagarin*.

直接話法から間接話法への転換で書き換える文法項目（人称代名詞、動詞時制、時・場所の副詞, etc.）は、言表様相から事象様相への切り替えと見なすことができる。

e. John said, "I will come here tomorrow".

f. John said that *he would go there the following day*.

元発話の翌日が g. の発話時のとき tomorrow を today に置き換えるのも事象様相である。

g. John said that he would come here *today*.

(75) 形式意味論では、不透明な文脈を作るモーダル助動詞や命題態度動詞を演算子（オペレータ）と見なし、演算子の作用域で処理している。

[Ralph は茶色の帽子の男をスパイだと思っている。この男は海岸で目撃された Ortcutt と同一人物なのだが、Ralph はそのことを知らない]

a. Ralph believes that *the man in the brown hat* is a spy.

この文の言表様相を表す式は概略次のようになる。

(x : Ralph) (x believes [y : the man in the brown hat] [y is a spy])

記述 the man in the brown hat は believe の作用域内にあり、ラルフの信念に属する。言い換えれば the man in the brown hat はラルフのパースペクティブに基づく記述である。

同じ状況で私が次のように発話したとする。

b. Ralph believes that *Ortcutt* is a spy.

この文は事象様相で、それを表す式は次のようになる。

(x : Ralph) (y : Ortcutt) (x believes [y is a spy])

記述 Ortcutt は believe の作用域の外にあり、ラルフの信念に属していない。したがって Ortcutt はラルフのパースペクティブではなく、この文の話し手のパースペクティブに基づく記述である。

(76) 括弧の機能への考察

a. 首相は「日本経済は上向きつつある」と発言した。

b. 文化的覇権者である西洋の「すぐれた、うた心

c. 首相が「コントロールされている」と確言した汚染水

例 a. のような統語論的括弧は、その中身を言表様相で解釈することを要請する。一方、例 b.c. のような語用論的括弧は、表向きは中身を言表様相で解釈することを要請しておきながら、裏で事象様相を設定し、かつ事象様相では括弧の中身が偽であることを強く匂わせるという点にある。

c. 首相が「コントロールされている」と確言した(けれども私はまったくそう信じてはいない) 汚染水

「コントロールされている」は首相のパースペクティブに属し(言表様相)、付け加えた「けれども私はまったくそう信じてはいない」は話し手(書き手)のパースペクティブに属する(事象様相)。山森の言う「語用論的括弧の中身は、焦点領域のパースペクティブに基づいて処理されなければならない」とは、このような処理過程を意味している。

分析哲学においては、指示の不透明性はモーダル助動詞や命題態度動詞の作用域の問題として処理される。作用域が生じるためには演算子がなくてはならないが、引用においては明示的な演算子が存在しない。

パースペクティブ・シフトの考え方ではこの問題は回避される。語用論的括弧は、表面上は括弧の中身を言表様相で解釈することを要請しておきながら、それと平行して事象様相のパースペクティブを談話に導入する。いわば「二重の声」(dual voice)の状態を実現している。その上で括弧の中身の真偽を、言表様相のパースペクティブではなく、事象様相のパースペクティブで判定することを要請する。これはパースペクティブ・シフトの結果生じる語用論的含意(pragmatic implicature)と考えられる。

11. 「共通基盤」 Common Ground とは何か

(77) 言葉の意味は文脈によって変わる (context-dependency)

- a. 今日はピクニックに絶好の天気だ。
 - i) 晴天快晴のとき → 字義どおりの意味
 - ii) 土砂降りの雨のとき → 皮肉、アイロニー
- b. ぶぶ漬けでもどうぞ。
 - i) 京都以外の人の発話 → 字義どおりの意味
 - ii) 京都人の発話 → そろそろ帰れという意味

(78) 文脈とは何か

What then *is* context? According to the dictionary, it is the “parts of a discourse that surround a word of passage and can throw light upon its meaning”. We call this *standard definition*. In psychology, its use has been extended far beyond the standard definition. And the further its uses have been extended, the murkier its denotation has become. Smith, Glenberg, and Bjork (1978) have complained that context has become “a kind of conceptual garbage can.”

For most purposes in psychology, this may not matter. Context, one could argue, is a term that is useful precisely because it is vague and general and can accommodate many different ideas. In some areas, however, context has been used not merely to *describe* phenomena, where vagueness and generality could be virtues, but to *explain* them, where vagueness and generality are vices. One of these areas is language comprehension, in which the theories appeal directly to context to explain how people decide what a speaker means. Theories of how people decide between two meanings of a word like *bank*, for example, appeal to people’s knowledge of the “context”, which includes not only the “parts of the discourse that surround” the word but also a good deal more. In theories like these, the characterization of context must be precise before their predictions can be precise. (Clark, H. H., *Arenas of Language Use*, The University of Chicago Press, 1992)

それでは文脈とは何だろうか。辞書によれば、それは「文章の中の単語を取り巻いている部分で、単語の意味を明らかにしてくれるもの」とある。これを標準的定義と呼ぼう。心理学では文脈という用語は標準的定義をはるかに超えて広く使われている。文脈という語の使用が広まれば広まるほど、その意味するところは茫漠としてくる。スミス、グレンバーグ、ビョーク(1978)は、文脈が「一種の概念的ゴミ捨て場」になってしまったと嘆いている。

心理学の大部分の目標においてはこのことは問題にならない。文脈という用語は、まさに曖昧で広い意味を持ち、雑多な考えを包摂してくれるからこそ便利なのだと言えよう。しかしある領域では、文脈という用語が現象を記述するためにではなく、説明するために使われている。記述するためならばその曖昧さと意味の広さは便利だが、説明するときにはそれは害になる。そのような領域のひとつが言語理解である。言語理解の研究においては、人々が話し手の意図する意味を理解する手がかりとして文脈が直接的に利用されている。たとえば *bank* 「岸辺、銀行」という単語のどちらの意味を選ぶかを説明する理論では、「文脈」の知識が必要だとされており、そこには単にこの語の「周囲を取り巻く部分」だけではなく、それ以外のたくさんのものが含まれている。このような理論では、文脈とは何かをはっきりさせなくてはならない。理論の予測が正確であるためにはそれが必要なのだ。

(79) 文脈とは共通基盤 (common ground)である

What we argue, briefly, is that for a listener to understand a speaker's meaning, he can confine himself to a certain limited domain of information, namely, the speaker's and his listener's common ground, that part of the speaker's and his listener's knowledge, beliefs, and assumptions that are shared. (...) Our proposal is straightforward: The intrinsic context for a listener trying to understand what a speaker means on a particular occasion is the common ground that the listener believes holds at that moment between the speaker and the listener he or she is speaking to. (...)

As a first approximation, the common ground between two people can be thought of as the information the two of them share. When Ann and Bob, for example, are standing together in a gallery looking at a Picasso painting, they share a good deal of information — about the objects depicted in the painting, about its colors, about its position on the wall, about Picasso, about modern painting, about each other, and so on. When Ann and Bob are later discussing their opinions of the painting with each other, they also share information about what each other has just said, meant, and implied. The common ground between them consists, roughly, of the knowledge, beliefs, and even suppositions shared in this way. (Ibid.)

私たちが端的に主張するのは、聞き手が話し手の意図する意味を理解するためには、聞き手はある種の狭い情報領域を参照すればよいということである。この領域とは、話し手と聞き手の共通基盤で、両者に共有されている話し手の知識、聞き手の知識、あるいは信念や想定をいう。(…) 私たちの提案はかんたんなものである。ある時点において話し手の意図する意味を理解しようとしている聞き手にとっての固有の文脈とは、その時点において、話し手と聞き手のあいだで成立していると聞き手が信じる共通基盤である。(…)

かんたんに言えば、二人の人間のあいだの共通基盤とは、二人が共有している情報だと言うことができる。たとえばアンとボブが画廊でピカソの絵を見ているとすると、二人は多くの情報を共有している。たとえば絵に描かれた事物、その色、絵が壁に掛かっている位置、ピカソについて、現代絵画、そしてお互いについて、などなど。後日アンとボブがお互いに絵の感想について話し合うとすると、二人が言ったこと、意味したこと、ほのめかしたことなどに関する情報を共有していることになる。おおまかに言えば、二人のあいだの共通基盤とは、このように共有されている知識・信念そして想定のことである。

12. 談話における Common Ground の働き – 定指示の理解過程

前節で見たように、Clark は談話における意味の理解には Common Ground を参照することが不可欠だとしている。では具体的に Common Ground は談話理解においてどのように働くのだろうか。また Common Ground は話し手と聞き手のあいだでどのように形成され理解されるのだろうか。このことを定指示 (definite reference) を例に取り上げて見てみよう。

(80) 定指示の形式意味論

Russell による定記述 (definite description) の分析 (“On denoting”, *Mind* 14, 1905)

The professor is drunk.

$\exists x [\text{professor}(x) \wedge \neg \exists y (\text{professor}(y) \wedge x \neq y) \wedge \text{drunk}(x)]$

“There is an x which is a professor, and there is no y such that y is a professor and not identical to x , and x is drunk.”

この分析は次の点を表現している。

- | | |
|---|--|
| a. existence : there is a professor | $\exists x (\text{professor}(x))$ |
| b. uniqueness : there is only one professor | $\neg \exists y (\text{professor}(y) \wedge x \neq y)$ |
| c. predication : this professor is drunk | $\text{drunk}(x)$ |

(81) Russell の分析の問題点 (1)

Russell の分析の第一段 $\exists x (\text{professor}(x))$ は、professeur である x の存在を言明 (assert) している。しかし定指示 the professeur は x の存在を言明しているのではなく、その存在を前提 (presuppose) している。定冠詞は存在前提 (existential presupposition) を表す。

(82) Russell の分析の問題点 (2)

Russell の分析の第二段 $\neg \exists y (\text{professor}(y) \wedge x \neq y)$ が表しているのは professeur である x の唯一性 (uniqueness) である。しかしこの世に professeur はたくさんいるし、問題の時点で酔っていた professeur に限っても複数いるだろう。唯一性は成り立たないのではないか。

この問題は談話領域 (universe of discourse) を狭めることによって解決するのが一般的である。つまり先週開かれたパーティーで、学生が数人と先生が 1 人しかいない談話領域を設定するのである。

(83) Russell の分析の問題点 (3)

しかし談話領域を狭めてもなお唯一性には疑問が残る。

- a. *The pig is grunting, but the pig with floppy ears is not grunting.* (Lewis)
- b. *The dog got in a fight with another dog.* (McCawley)
- c. *It's hot here. May I open the window?*
- d. *Your room is on the third floor. Take the elevator.*
- e. *Towards evening we came to the bank of a river.* (Christophersen)
- f. *My mother died in the hospital in Paris, in 1982.*
- g. *She gave the wrong answer and had to be disqualified.* (Abbott)

(84) Hawkins の location theory

Hawkins, J. A., *Definiteness and Indefiniteness : A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm, 1978. では、話し手は定冠詞 the を用いるとき、次の三つの行為を行うとされている。

- a. He introduces a referent (or referents) to the hearer.
- b. He instructs the hearer to locate the referent in some shared set of objects.
- c. He refers to the totality of the objects or mass within this set that satisfy the referring expression.

(例) Ann says to Bob, “Bring me *the* apples.”

- a. アンは指示表現 *the apples* によってボブに指示対象を提示する。
- b. アンは同時にボブに、*the apples* の指示対象を二人が了解している事物の集合のなかから探し出すよう指示する。二人が買い物から帰ったばかりで、荷物が玄関に置いてある状況を想定すると、了解済みの事物の集合は買って来たものの集合 [牛肉 400g、ニンジン 1kg、ジャガイモ 1kg、リンゴ 5 コ] である。ボブは指示に従い、*the apples* の指示対象をこの集合のなかの「リンゴ」だと理解する。
- c. アンはこの指示行為によって、記述 *the apples* を満たす対象「リンゴ 5 コ」の全部を指示する。

(85) Hawkins は定冠詞の指示に必要な *shared set of objects* は 共有知識 (*shared knowledge*) に基づいて構築されるとしている。定冠詞の用法と結びつく共有知識は次のとおり。

- a. Anaphoric use : I bought a lathe, but *the machine* didn't work right.
先行文脈 I bought a lathe が旋盤 1 つを含む共有集合を形成する。
- b. Visible situation use : Pass me *the bucket*.
話し手と聞き手の視知覚が「知覚可能な事物」の共有集合を形成する。
- c. Immediate situation use : [張り紙] Beware of *the dog*.
聞き手に犬が見えなくても、犬の存在は推測可能であり、張り紙がしてある家のなかにいる犬が共有集合として了解される。
- d. Larger situation use based on specific knowledge
(Ann to Bob) I'm going to *the store*.
アンが行きつけの店をボブが知っているならば、*the store* の指示対象は了解された集合を形成する。
- e. Larger situation use based on general knowledge
[初めて訪れた都市で] I wonder where *the city hall* is.
ある程度の大きさの都市なら市役所があるという共有知識に基づいて *the city hall* の指示対象は了解された集合を形成する。
- f. Associative anaphoric use : A car just went by and *the exhaust fumes* made me sick.
自動車からは排気ガスが出るという共有知識に基づいて *the exhaust fumes* の指示対象は了解された集合を形成する。
- g. Unavailable use : *The woman whom Max went out with last night* was nasty to him.
関係節 *the woman whom Max went out last night* は Max went out with a woman last night. という文を前提として成り立つ。*the woman whom Max went out last night* の指示対象は前提が形成する集合に含まれた a woman であると了解される。
- h. Unexplanatory modifier use : *The first person to sail to America* was an Icelander.
この用法は Donnellan が定名詞句の「属性的用法」(attributive use)と呼んだもので、特定の対象を指示する意図を持たない用法である。したがって location theory が想定する共有集合を必要としない。

(86) Clark は英語で定指示を行う場合には、次のような操作が行われとしている。

The Direct Definite Reference Convention

In making a direct definite reference with term *t* sincerely, the speaker intends to refer to

1. the totality of objects or mass within a set of objects in one possible world, which set of objects is such that
2. the speaker has good reason to believe
3. that on this occasion the listener can readily infer
4. uniquely
5. mutual knowledge of the identity of that set
6. such that the intended objects or mass in the set fit the descriptive predicates in *t*, or, if *t* is a rigid designator, are designated by *t*.

(Clark, H. H., *Arenas of Language Use*, The University of Chicago Press, 1992)

13. 談話モデル理論 **Discourse Model Theory**

(87) 談話の定義

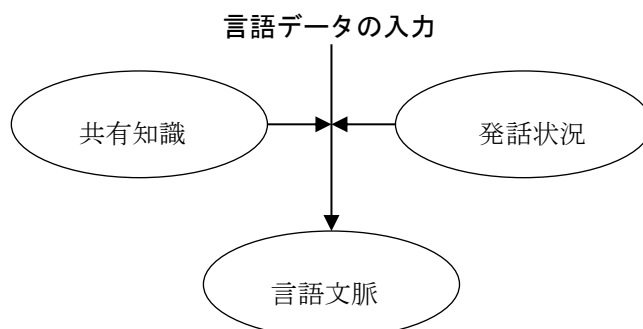
談話 (discourse) とは、話し手と聞き手の相互行為 (interaction) により、時系列に沿って、局所的に構築・処理される累加的 (incremental) な心的表象 (mental representation) である。

(88) 談話モデル Discourse Model

談話モデルとは、話し手と聞き手の双方が保持し、談話の構築と理解にあたってアクセスされる心的領域である。この心的領域には指示表現の指示対象である談話指示子 (discourse referent) とその属性情報が登録され、談話の進行に伴って更新される一種のファイルシステム、あるいはデータベースである。

(89) 談話モデルを構成する領域

- a. 共有知識領域 Shared Knowledge
 - a-1. 百科事典的知識領域 Encyclopaedic Knowledge
 - a-2. エピソード記憶領域 Episodic Memory
- b. 発話状況領域 Context of Use
- c. 言語文脈領域 Linguistic Context



談話の中でやり取りされる言語データは、共有知識領域や発話状況領域に格納された情報を参照しつつ、言語文脈領域に書き込まれ処理される。そのデータのうち必要なものは、後に共有知識領域に転送され蓄積される。

(90) 共有知識領域に登録され管理される談話指示子

a. 百科事典的知識領域 Encyclopaedic knowledge

ある文化共同体に属する人ならば誰でも知っていると思なされる、世界についての知識（地理、歴史、科学、神話など）。(85)の e. で Hawkins が general knowledge と呼んでいるものに対応する。

Columbus discovered America in 1492. [固有名]

The earth goes around the sun. [唯一物]

Dogs are loyal to their master. [類名 kind]

b. エピソード記憶領域

個人的体験に由来する知識や記憶についての情報。百科事典的知識が文化共同体に属する人のあいだでほぼ共通であるのに対して、エピソード記憶は個人的なものであり個人によって異なる。(85)の d. で Hawkins が specific knowledge と呼んでいるものに対応する。

Have you heard of **Paul** recently?

The restaurant we went to last week was very good.

(91) 発話状況領域に登録され管理される談話指示子

発話状況領域は発話の場に相当し、デフォルトで話し手 I、聞き手 you と発話現場を含む。ただし、それは物理的な現場ではなく、現場について話し手と聞き手が保持している心的表象である。

a. 直示表現 deixis

[指さしながら] Pass me **that hammer**.

[セーターを指さしながら] I'll take **this one**.

b. 定冠詞の外界指示用法 (exophoric use)

[部屋に入って来た人に] Shut **the door**.

[食卓で] Pass me **the salt** please.

→(85)の b. で Hawkins が visible situation use と呼んでいるものに対応する。

(92) 言語文脈領域に登録され管理される談話指示子

言語文脈領域だけは談話開始時に初期値がゼロで、談話の進行と共に談話指示子とその属性情報が登録・蓄積される。

a. 照応的代名詞

A boy came in. **He** sat down.

b. 照応的定名詞句

There lived a wizard and a witch in Africa. **The wizard** was wise.

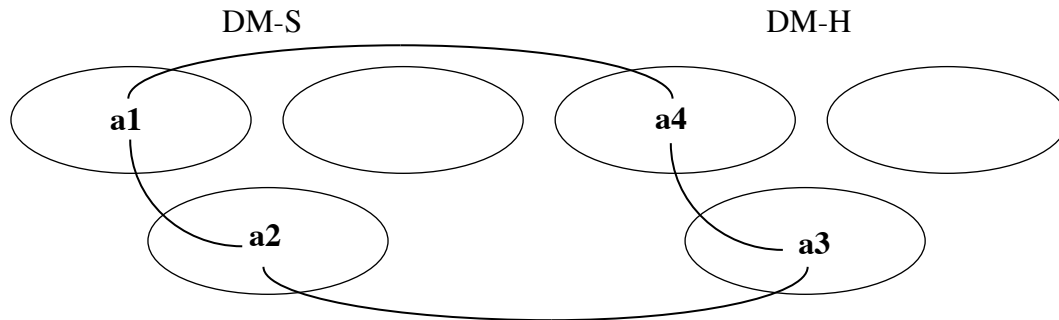
→ (85)の a. で Hawkins が anaphoric use と呼んでいるものに対応する。

(93) 談話モデルの特性

- a. 談話モデルは Fauconnier のメンタル・スペース理論を下敷きになっているが、話し手側のモデル (DM-S)と聞き手側のモデル (DM-H)を設定し、談話理解を DM-S と DM-H の調整過程と見なす点異なる。
- b. Clark は文脈とは共通基盤 (common ground) のことだとし、それは共有知識のことであるととした。しかし話し手と聞き手の間でどのように共有知識が管理され更新されるかの詳細を明らかにしていない。談話モデルはこれを明らかにすることを目標としている。
- c. 談話モデルは談話の逐次的処理を累積的 (incremental) に表現できるために、談話の動的な推移を表示することができる。

(94) 共有知識領域が発動される例

Have you heard of *Paul* recently?



注 : a1, a2, etc.は談話指示子(discourse referent)を、弧線は ID コネクタを表す。

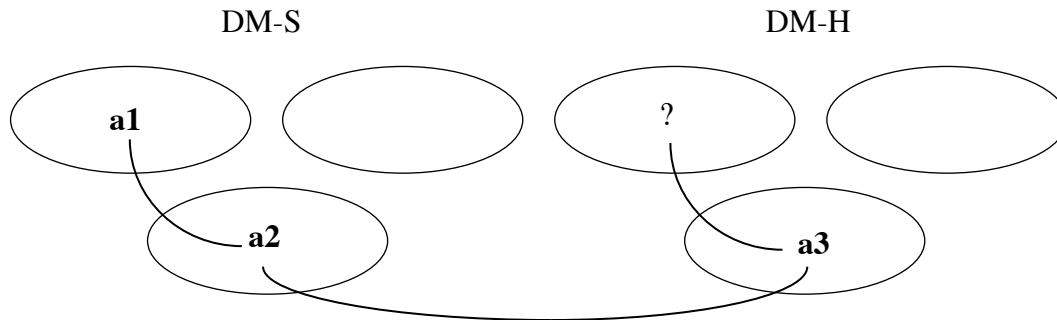
話し手の談話モデル (DM-S) には、Paul の談話指示子 a1 が登録されている。話し手は発話によって自分の言語文脈領域にそれを a2 として書き込む。a1 と a2 は ID コネクタで結合されている。a2 は聞き手の談話モデル (DM-H) の言語文脈領域に a3 としてコピーされる。すると聞き手は a3 の指示を決定する探索課題を実行しなければならない (ポールって誰?)。a3 は新たに言語文脈領域に持ち込まれたものであり、この領域中では指示を決定できない。そこで聞き手は自分の共有知識領域を探索し、登録されていた a4 だと同定する (ああ、あのポールのことね)。a3 と a4 は ID コネクタで結ばれ、a4 は a1 と ID コネクタで結合される (あなたが言うポールは私が知っているポールと同一人物だ)。

- a1 = 話し手が知っているポール
- a2 = 話し手が言語化したポール
- a3 = 聞き手が聞いたポール
- a4 = 聞き手が知っているポール

(95) 共有知識領域の発動が失敗した例

A : I met *Augustus* yesterday.

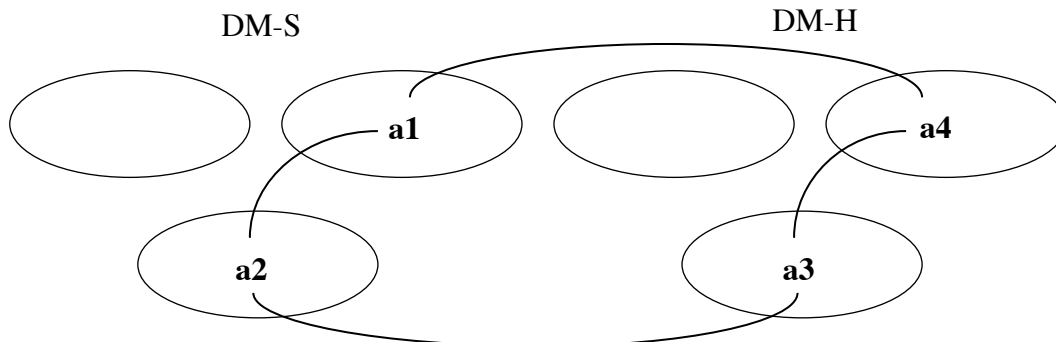
B : Augustus? Who is Augustus?



a1→a2→a3 までの処理は(94)と同じ。a3 を同定するために、聞き手は共有知識領域を探索に行くが、該当する談話指示子 {Augustus という名であるという属性情報を持つ指示子} を見つけることができず、処理はここで停止する。そこで聞き手は指示対象についての情報を得るために談話の方向性を切り替えて、Who is Augustus?というメタ談話モードに移行する。

(96) 発話状況領域が発動される例

Who is *that man* over there?



話し手の発話状況領域には *that man* の談話指示子 a1 が登録されている（話し手に男が見えている）。話し手は発話によって a2 を自分の言語文脈領域に書き込む。a2 は聞き手の言語文脈領域にコピーされる。聞き手は話し手が発話と同時に行った指さしなどを手がかりとして、a3 の同定のために自分の発話状況領域を探索に行き、a4 として同定する（聞き手にも問題の男が見えた）。最後に a4 は a1 と ID コネクタで結合され、*that man* による指示行為は完了する。

(97) 名詞句と代名詞の解釈規則

a. 不定名詞句 aN（存在解釈、特定解釈、非特定解釈）

不定名詞句 aN は、N とカテゴリー化される談話指示子を言語文脈領域にあらたに書き込めという指令である。

b. 照応的定名詞句 the N

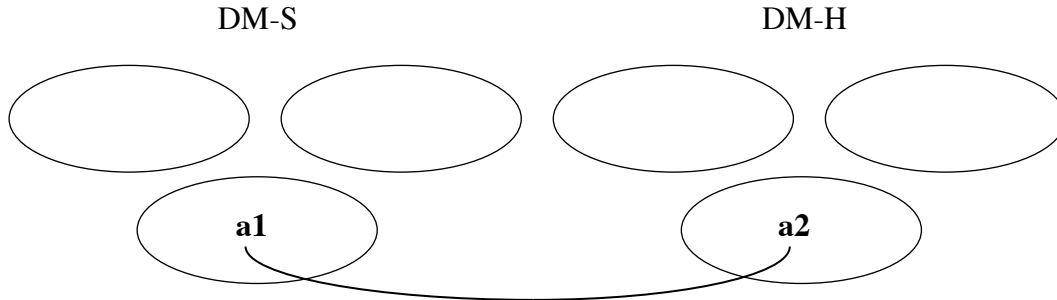
照応的定名詞句 the N は、すでに言語文脈領域に登録済みで、N とカテゴリー化されている談話指示子、もしくは N の上位カテゴリー（ex. a lathe → the machine）である M である談話指示子を同定せよという指令である。

c. 照応的代名詞 he / she / it

照応的代名詞 he / she は、すでに言語文脈領域に登録済みで、[human]とカテゴリー化されている談話指示子を同定せよという指令、it は [thing]または [propositional content]として登録されている談話指示子を同定せよという指令である。

(98) 言語文脈領域が発動される例

A boy came in. He sat down.



《第 1 文の処理手順》話し手は *A boy came in.* という発話によって、自分の言語文脈領域に a boy に相当する談話指示子 a1 を書き込む ((97 a)の不定名詞句解釈を適用)。a1 は聞き手の言語文脈領域に a2 としてコピーされる。

《第 2 文の処理手順》話し手は *He sat down.* という発話によって、自分の言語文脈領域で [a boy = he]という照応関係を構築する。これにより聞き手に代名詞 he の処理が要請される。聞き手は (97 c) を適用して、登録済みの a2 と he のあいだに照応関係を形成する。

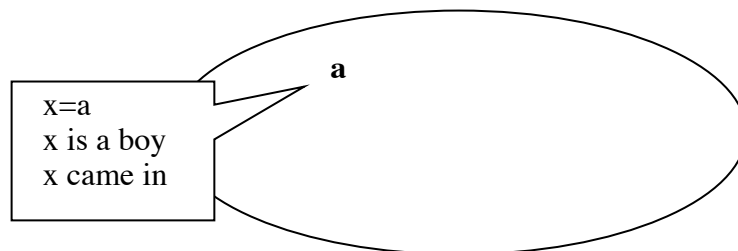
(100) 談話の累積性の表現

談話の累積性を表現するには、談話指示子の追加と並んで、談話指示子の持つ属性情報も表示しなくてはならない。談話指示子にはタグが付いていて、タグの中に属性情報が順次書き込まれていくと考える。

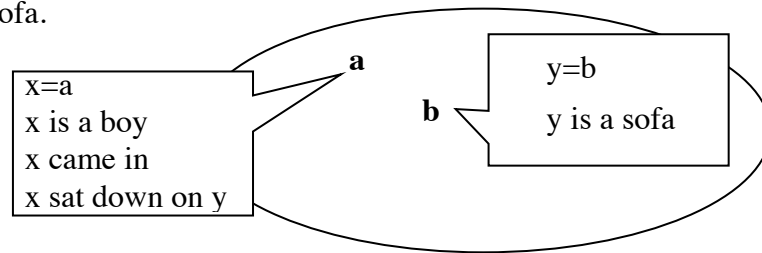


(101) *A boy came in. He sat down on the sofa. He found a wallet under the sofa.*

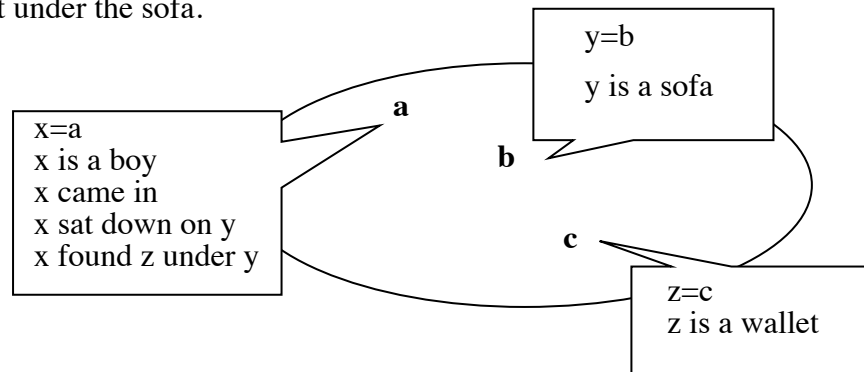
i) *A boy came in.*



ii) He sat down on the sofa.



iii) He found a wallet under the sofa.



14. Common Ground と断定と可能世界

(102) [=79] 私たちが端的に主張するのは、聞き手が話し手の意図する意味を理解するためには、聞き手はある種の狭い情報領域を参照すればよいということである。この領域とは、話し手と聞き手の共通基盤 (Common Ground) で、両者に共有されている話し手の知識、聞き手の知識、あるいは信念や想定をいう。(…) ある時点において話し手の意図する意味を理解しようとしている聞き手にとっての固有の文脈とは、その時点において、話し手と聞き手のあいだで成立していると聞き手が信じる共通基盤である。

(Clark, H. H., *Arenas of Language Use*, The University of Chicago Press, 1992)

【考察】

Clark は言語の理解に必要とされる文脈 (context) とは共通基盤 (Common Ground) のことであると結論する。文脈という用語のふつうの用法では、言語的文脈 (linguistic context) と理解されることが多いが、Clark の用法ではより広い概念で、言語的文脈を含む「話し手と聞き手がその時点で共有しているものすべて」を指す。

Clark の言う Common Ground とは、談話モデルにおける「共有知識領域」「発話状況領域」「言語文脈領域」を合わせたものに他ならない。談話モデルとは、「発話時において話し手と聞き手が共有しているもの」を表示しアップデートを記録するための装置である。

(103) 発話と文の意味

このような言語観に立つと、「発話」と「文の意味」をより明確に定義できる。発話とは、言語を用いることによって相手の談話モデルをアップデートすることである。談話モデルがある文の発話によって状態 Φ_1 から状態 Φ_2 へとアップデートされたとき、その文の意味とは Φ_1 と Φ_2 の差分である。

(104) 談話モデルはどの時点でアップデートされるか

A : What do you see from here?

B : A young lady is walking with her dog in the park.

この文には 3 つの談話指示子がある。a =[a young lady]、b =[her dog]、c =[the park]である。これらの談話指示子を属性情報とともに言語文脈領域に登録するには、おたがいの関係が必要になる。

- i) a は b を連れている
- ii) b は a の所有物である
- iii) a と b はいっしょに移動している
- iv) a と b は現在 c の中にいる、etc.

これらの関係がすべて利用可能になるのは、発話の終了時、つまり文を発話し終えた時点である。

談話モデルのアップデート規則

文 S が発話されたとき、聞き手は自分の談話モデル DM-H を文の発話終了時点においてアップデートせよ。

(105) 談話モデルのアップデート規則と陳述論

渡辺実が「叙述」と「陳述」を区別したのは、「明日から煙草をやめる」のように用言を持つ文であっても、

[明日から煙草をやめる] のは体のためばかりではないのです。

のように、他の文に埋め込まれて、それ自身が伝達力を持たない場合があるからであった。

「叙述」は事態を描き出す言語素材に留まり、「僕は明日から煙草をやめるよ」のように、叙述に聞き手目当ての要素が加わることで初めて相手に何かを伝える「陳述」になると考えた。ここから次の仮説を導くことができる。

【仮 説】

国語学で言う「陳述の力を持つ文」とは、DM-H をアップデートする文のことである。陳述以前の「叙述」は、仮に DM-H に何かの情報を書き込むことはあっても、それは部分的に留まり、DM-H 全体をアップデートさせることはない。「陳述」とは DM-H をアップデートさせる力のことである。

(106) 談話モデルのアップデートと「断定」(assertion)

DM-H をアップデートさせるには、単に発話が「終了」しただけでは不十分である。次の例では発話が中途半端に終了しているが、これでは DM-H をアップデートできない。

- a. あ、君、それ…
- b. いつまでもこんな所で…

DM-H のアップデートには文が断定 (assert) されることが必要である。

- c. 君、それ僕のです。
- d. いつまでもこんな所で待っているわけにはいかない。

「断定」とは、ふつう文の意味内容（命題）が真であることを話し手が責任を持って聞き手に向かって述べることを意味する。断定の意味をそのように理解しても、DM-H のアップデートを引き起こすことは説明可能だが、ここでは少し違う考え方をしてみたい。

(107) 命題の意味とは可能世界の集合である

A proposition — the content of an assertion or belief — is a representation of the world as being a certain way. But for any given representation of the world as being a certain way, there will be a set of all possible states of the world which accord with the representation — which **are** that way. So any proposition determines a set of possible worlds. And, for any given set of possible worlds, to locate the actual world in that set is to represent the world as being a certain way. So every set of possible worlds determines a proposition. (...) If we assume, as seems reasonable, that representations which represent the world as being the same way have the same content, then we can conclude that there is one-to-one correspondence between sets of possible worlds and propositions. Given this correspondence, it seems reasonable to use sets of possible worlds, or (equivalently) functions from possible worlds into truth values, to play the role or propositions in our theory. (Stalnaker, R.C. “Assertion”, P.Cole (ed) *Syntax and Semantics* vol. 9, *Pragmatics*, Academic Press, 1978)

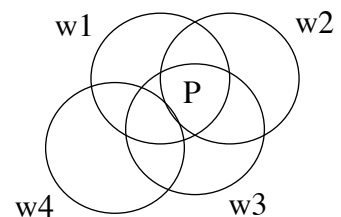
命題（断定や信念の内容）とは世界のあり方の表現である。しかし、あるあり方で存在する世界にとって、その表現と合致する（そのあり方である）世界の状態の集合を考えることができる。したがって、あらゆる命題は可能世界の集合を決定する。そして、任意の可能世界の集合について、現実世界をその集合の中に含めるということは、世界をあるあり方において表現することである。だからあらゆる可能世界の集合は、ひとつの命題を規定する。(…) ここで世界を同じあり方で表現するふたつの表現は同じ内容を持つと仮定すると、可能世界の集合と命題のあいだには、一対一の対応関係があると結論づけられる。この対応関係を踏まえて、可能世界の集合、または同じことだが、可能世界から真偽値への関数を、私の理論において命題の役割を果たすものとみなすことができる。

【解 説】

上に引いた Stalnaker の引用では、「命題とは可能世界から真偽値への関数である」と述べられている。これをわかりやすく示すと次のようになる。

命題 $P = \{\text{John is a teacher}\}$ とする。可能世界として次のものがあると仮定する。

- w1: ジョンが教師であり、オバマがアメリカ大統領であり、
地球が太陽系の 3 番目の惑星である世界
- w2: ジョンが教師であり、ゴアがアメリカ大統領であり、
地球が太陽系の 3 番目の惑星である世界
- w3: ジョンが教師であり、フジモリがアメリカ大統領であり、
地球が太陽系の 5 番目の惑星である世界
- w4: ジョンが庭師であり、オバマがアメリカ大統領であり、
地球が太陽系の 5 番目の惑星である世界



→ このとき、命題 P に対応する可能世界の集合は $\{w1, w2, w3\}$ である。命題を可能

世界を入力とし真偽値を出力とする関数と見なすと次のようになる。

$P(w1) \rightarrow \text{true}$

$P(w2) \rightarrow \text{true}$

$P(w3) \rightarrow \text{true}$

$P(w4) \rightarrow \text{false}$

このとき命題 $P = \{\text{John is a teacher}\}$ は可能世界の集合 $\{w1, w2, w3\}$ を決定し、それ以外の可能世界を排除する。

(108) **common ground**

The third notion I need is the concept of speaker presupposition. This, I want to suggest, is the central concept needed to characterize speech contexts. Roughly speaking, the presuppositions of a speaker are the propositions whose truth he takes for granted as part of the background of the conversation. A proposition is presupposed if the speaker is disposed to act as if he assumes or believes that the proposition is true, and as if he assumes or believes that his audience assumes or believes that it is true as well. Presuppositions are what is taken by the speaker to be the COMMON GROUND of the participants in the conversation, what is treated as their COMMON KNOWLEDGE or MUTUAL KNOWLEDGE. The proposition presupposed in the intended sense need not really be common or mutual knowledge; the speaker need not even believe them. He may presuppose any proposition that he finds it convenient to assume for the purpose of the conversation, provided he is prepared to assume that his audience will assume it along with him.

(Stalnaker, *op. cit.*, p. 321)

私が必要とする第三の概念は話し手の前提という概念である。この概念は、発話の文脈とは何かを解明するのに中心的な役割を果たすものだと言いたい。大まかに言うと、話し手の前提とは、真であり、会話の基盤をなすと話し手が判断している命題の集合である。ある命題が前提されているとは、話し手がその命題が真であると信じて振る舞い、かつ聞き手もまたその命題が真であると信じていると話し手が思っている場合である。前提とは、会話の参加者のあいだの共通基盤として扱われるものであり、共有知識として働くものである。ここで言う意味で前提されている命題は、ほんとうに話し手と聞き手のあいだで共有されたり、共有知識になっている必要はない。話し手はそう信じる必要もない。聞き手もまたそう思ってくれるだろうと考えられるならば、話し手はどんな命題でも、会話の目的にとって都合がよいと判断したら、前提されていると見なすことができる。

(109) 文脈集合 (context set)

It is **PROPOSITIONS** that are presupposed — functions from possible worlds into truth values. But the more fundamental way of representing the speaker's presupposition is not as a set of propositions, but rather as a set of possible worlds, the possible worlds compatible with what is presupposed. This set, which I will call the **CONTEXT SET**, is the set of possible worlds, recognized by the speaker to be the “live options” relevant to the conversation. A proposition is presupposed if and only if it is true in all of these possible worlds. (...) To engage in conversation is, essentially, to distinguish among alternative possible ways that things may be. The purpose of expressing propositions is to make such distinctions. The presuppositions define the limits of the set of alternative possibilities among which speakers intend their expressions of propositions to distinguish.

(*ibid.*, pp. 321-322)

前提されているのは命題である。つまり可能世界から真偽値への関数である。しかし話し手の前提を表現するもっと有効なやり方は、命題の集合としてではなく、可能世界の集合と規定することである。つまり、前提とは、前提されていることが成り立つ可能世界の集合なのである。この集合を「文脈集合」(context set)と呼ぶことにしよう。文脈集合とは、今行なわれている会話との関連において選び出された話し手が見なす可能世界の集合である。命題はこの集合に含まれるすべての可能世界において真であるときに限り、前提されていることになる。(…) 会話に参加するということは、物事のあり方の可能な選択肢のなかからひとつを取り立てるということである。命題を述べるということは、この取り立てを行なうことに他ならない。前提は、話し手が物事の多様なあり方のなかで自分の命題を取り立てる際の、可能な選択肢の限界を定めるのである。

(110) 断定 (assertion) とは何か

To make an assertion is to reduce the context set in a particular way, provided that there are no objections from the other participants in the conversation. The particular way in which the context set is reduced is that all of the possible situations incompatible with what is said are eliminated. To put it in a slightly different way, the essential effect of an assertion is to change the presuppositions of the participants in the conversation by adding the context of what is asserted to what is presupposed. (ibid.)

断定とは、文脈集合を特定のやり方で狭めることである。ただし、会話に参加している人たちから反対意見が出ない場合に限られる。文脈集合を特定のやり方で狭めるとは、述べられた内容と両立しないすべての可能世界を文脈集合から排除することである。言い換えると、断定の最も重要な効果とは、断定された内容を前提に付け加えることによって、会話の参加者の前提集合を更新することにある。

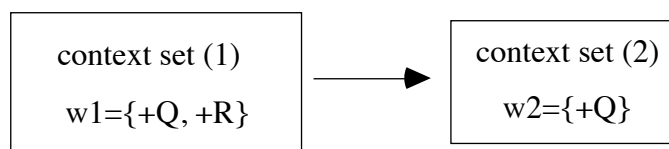
【考 察】

命題 P = My brother finally found a job. とすると、この命題は次の前提を持つ。

前提 (1) : The speaker has a brother. (Q)

前提 (2) : The speaker's brother was out of job. (R)

w1 を Q も R も真である世界、w2 を Q は真であるが、R は偽である世界としよう。P が発話される前には、前提 (1) (2) が成り立つ世界、つまり「話し手に兄弟がいて、失業中である」世界が文脈集合であった。P の発話によって、話し手は、文脈集合のなかから R が成り立つ世界を排除し、文脈集合を狭める。



一般に、私たちが何かを知るということは、世界のあり方を特定の方向に狭めることである。たとえば、初対面の人がいるとする。すると可能な文脈集合（のごく一部）は、

- (1) その人は結婚している / 結婚していない

(2) その人は私より年上である / 年下である

(3) その人は東京生まれである / 秋田生まれである, etc.

相手が「私は東京生まれで 25 歳です」と発話する。聞き手が 30 歳とすると、文脈集合の中から「相手は秋田生まれである」「相手は年上である」という可能世界が削除される。断定は文脈集合を狭める効果を持つ。

(111) 断定と共有知識領域への情報転送

談話モデル理論では、Stalnaker の言う断定の効果、すなわち文脈集合（命題と両立可能な可能世界の集合）を狭める効果は、言語文脈領域から共有知識領域への情報転送、および既存のデータベースへの転送された情報の付加として表現される。

A : My father moved to LA last week.

B : Really ? I didn't know that.

A's father を談話指示子 F とする。談話の開始前の DM-H の共有知識領域には、次の情報が Common Ground として存在すると仮定する。つまり B が A の父親について知っていることである。

i) F lives in New York with A.

ii) F is a fund manager.

iii) F is divorced

iv) F has two children including A.

A の発話の命題 $P = \text{My father moved to LA last week.}$ は、i)~iv) が成り立つ可能世界 w_1 と両立しない情報を含む。A の発話を聞いた B は、自分の DM-H の言語文脈領域から共有知識領域に命題 P を転送する。そして DM-H をアップデートして、更新された可能世界 w_2 と両立可能な文脈集合に書き換える。

i) F lives in LA.

ii) F is a fund manager.

iii) F is divorced

iv) F has two children including A.

15. 真性モダリティを持たない文再考

(112) 料理のレシピ

ニンジンサラダ

1. ニンジンは皮をむいてヘタを落とす。芯の白い部分を包丁の先で除く。
2. チーズ用のおろし金で千切りにする。
3. ボウルにワインビネガーと塩、コショウを入れて塩が溶けるまでよく混ぜてから油を混ぜ合わせる。
4. ニンジンを加えて全体を混ぜ、器に盛る。

(113) 取扱説明書

CD ブレーヤーを充電式電池で使う

1. 本体のふたを開け、中の電池ふたを開ける。
2. 充電式電池を電池入れの+の表示に合わせて入れ、カチッと音がするまでふたを閉める。
3. AC パワーアダプターをつなが CHARGE ボタンを押す。
4. 充電が完了したら AC パワーアダプターをはずす。

(114) 芝居のト書き

第三場

緑川夫人、B 室へ入ってくる。B 室明るくなる。A 室へ入り、B 室との境のドアを閉め、小さなスタンドだけをつけ、ベルを押す。やがて B 室ノックされる。夫人、「どうぞ」と作り声で言う。ボオイ B 室へ入って来る。

ボオイ お呼びでございましたか。

緑川夫人 ええ、下のバアに父がいるはずなの。もうおやすみになりませんか、って呼んでくださらない。 (三島由紀夫『黒蜥蜴』)

(115) 物語の粗筋

年老いたキューバの漁師のサンチャゴは、助手の少年と小さな帆かけ舟でメキシコ湾の沖に出て、一本釣りで大型魚を獲って暮らしを立てている。あるとき数ヶ月にわたり、一匹も釣れない不漁が続き、少年は両親から、別の船に乗ることを命じられる。助手なしの一人で沖に出たサンチャゴの針に、巨大なカジキが食いつく。3日にわたる孤独な死闘ののち、サンチャゴはカジキを仕留めるが、獲物が大きすぎて舟に引き上げられず、横に縛りつけて港へ戻ることにする。しかし傷ついた魚から流れる血の臭いにつられ、サンチャゴの舟はアオザメの群れに追跡される。必死の闘いにかかわらず、舟に結びつけたカジキの体は、サメの群れに喰いつくされていく。ようやく港にたどりついたとき、釣り上げたカジキは、巨大な骸骨になっている。 (ヘミングウェイ『老人と海』)

(116) 虚性モダリティとは断定の不在である

料理のレシピと取扱説明書は、「このときはこうせよ」という指示を集めたものであり、私たちが現実と見なしている「世界のあり方」(the way the world is) についての知識を与えるものではない。命題は断定されていないため、文脈集合を狭める効果を持たない。つまり真性モダリティを持たない。談話モデルでは DM-H のアップデートは起きない。

芝居のト書きと物語の粗筋は、演劇・物語という虚構世界の作り方の指示書である。このため同様に命題は断定されず、真性モダリティを持たない。

料理のレシピ・取扱説明書・芝居のト書き・粗筋で、日本語では「ル形」が用いられ、英語では現在形が使われるのは、断定がなく真性モダリティを持たないためである。「ル形」は「タ形」に較べて、「何か出来事が起きた」という出来事性が希薄である。

(117) 大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたい。そんな思いから、愛媛県喜多郡内子町川中、農林業西谷一徳さん (41) は、自宅前の山林と農地七千平方メートルをつぶして専用飛行場を作り、今月初めから超軽量飛行機の操縦を楽しんでいる。

【考察】

料理のレシピ・取扱説明書・芝居のト書き・粗筋は、真性モダリティを持たない文のうち、引用とは考えにくいグループであった。それにたいして (117) は一種の引用であり、自由間接話法と見なしてもよい例である。引用と見なせるグループと見なしにくいグループをまとめて説明するにはどうすればよいだろうか。

両方をまとめて説明できる原理は、「断定の不在」である。(117)の下線部は文中に登場する西谷一徳の願望を本人に代わって代弁しているだけであり、この文章の書き手が断定しているのではない。したがって文脈集合を狭める力を持たず、談話モデルでは DM-H のアップデートは起きないと考えられる。

(117) パースペクティブ・シフトを起こす語用論的括弧

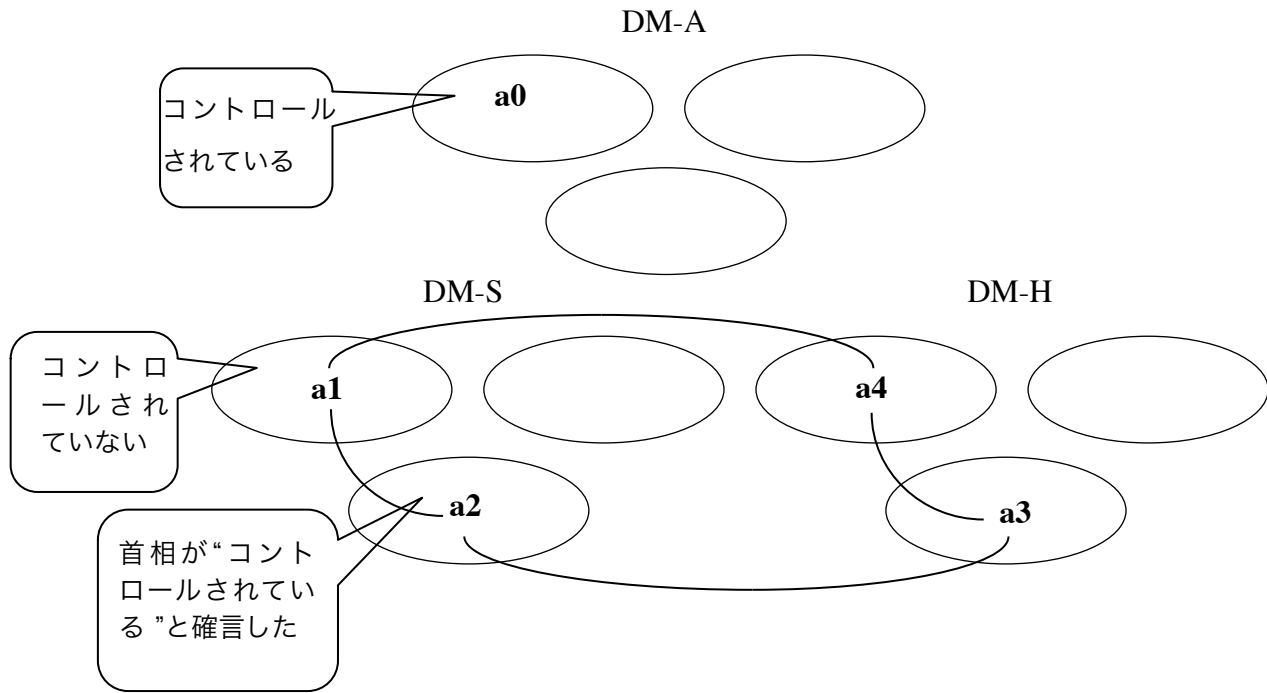
- a. 首相が“コントロールされている”と確言した汚染水
- b. 西洋の“すぐれた”歌ごころ

山森は語用論的括弧の解釈規則として次のように述べた。

- i) 語用論的括弧は、焦点領域のパースペクティブを Common Ground に付加する機能を持つ。
- ii) 語用論的括弧の中身は、焦点領域のパースペクティブに基づいて処理されなければならない。
- iii) 語用論的括弧は、現行のパースペクティブの対比パースペクティブを焦点領域のパースペクティブとして想起することを受け手に要求する。

これを談話モデル理論によって書き換えると次のようになる。私たちが現実と見なしている「世界のあり方」は、共有知識領域に談話指示子とその属性情報として登録されている。安倍総理の談話モデル DM-A の共有知識領域では、「汚染水」の談話指示子には「コントロールされている」(under control) という属性情報がついている。しかしこの文の話し手はその認識を共有していないので、DM-S の共有知識領域の「汚染水」の談話指示子には、「コントロールされていない」という属性情報がついている。語用論的括弧は聞き手に、括弧の中身を DM-A ではなく DM-S を参照して解釈するよう要請する。

次のページの図では、上にある DM-A は安倍首相の保持する談話モデルを表す。下にある DM-S は「首相が“コントロールされている”と確言した汚染水」という語用論的括弧を使った話し手の談話モデル、DM-H はその発言の聞き手（読み手）の談話モデルである。



a2 の属性情報「首相が“コントロールされている”と確言した」のうち、“コントロールされている”は DM-A の共有知識領域にある談話指示子 a0 の属性情報を反映している（安部首相の信念）。聞き手は a2 とその属性情報を DM-H の言語文脈領域に、a3 としてコピーする。聞き手は次に a3 の属性情報を DM-H の共有知識領域内の「汚染水」の談話指示子 a4 に新たに書き込む。このとき語用論的括弧の働きによってパースペクティブ・シフトが起きて、聞き手は発話元の DM-A ではなく、それと対立関係にある DM-S を参照して、a4 に「コントロールされていない」という属性情報を付け加えることを要請される。

15. Kaplan のモンスター

(118) Kaplan (1977) によれば、代名詞などの指標詞 (indexicals) は文脈によって指示対象が変化することはないとされている。もし指示詞を変化させるようなオペレータが存在するとすれば、それは‘モンスター (怪物、monster)’とでも呼ばれるべきもので、そのようなモンスターは存在しないということになっている。

それに対して Schlenker (1999, 2003) は、アムハラ語等の間接話法における指示詞の指示対象の変化をとりあげて、say、tell などの態度述語は文脈そのものを変化させる‘モンスター’だと主張した。

(8) a. アムハラ語 : John_i says that I_i am a hero.

b. 英語 : John_i says that he_i is a hero. / *John_i says that I_i am a hero.

Schlenker (2003) によると、報告述語 say は文脈のパラメーターを変化させる演算子となって、文脈を変化させる。Assert_{j^m}(t, w) を、時間 t、可能世界 w におけるジョンの断定 assertion と合致する文脈 (コンテキスト) の集合とすると、

(9) John says that ϕ is true in context c at time t in world w just in case every context

compatible with what John asserts at t in w is one in which ϕ could be uttered truly.

(Schlenker 2003: 37)

態度述語に埋め込まれることによって文脈そのものが変化しているのを、代名詞の指示対象が変化していると主張した。

Schlenker, P., *Propositional Attitudes and Indexicality. A Cross-Categorial Approach*, Ph.D. thesis, MIT, 1999

Schlenker, P., “A plea for monster”, *Linguistics & Philosophy* 26, 2003

(西口純代「物語文の現在時制における視点と文脈の変化」、河上誓作・谷口一美編『ことばと視点』英宝社、2007)

(119) Are there such operators as ‘In some contexts it is true that’, which when prefixed to a sentence yields a truth if and only if in some context the contained *sentence* expresses a content that is true in the circumstances of that context? Let us try it:

(9) In some contexts it is true that I am not tired now.

For (9) to be true in the present context it suffices that some agent of some context not be tired at the time of that context. (9), so interpreted, has nothing to do with me or the present moment. But this violates Principle 2! Principle 2 can also be expressed in more theory laden way by saying that indexicals always take primary scope. If this is true — and it is — then no operator can control the character of the indexicals within its scope, because they will simply leap out of its scope to the front of the operator. I am not saying that we could not construct a language with such operators, just that English is not one. And such *operators could not be added to it*.

There *is* a way to control an indexical, to keep it from taking primary scope, and even to refer it to another context (this amounts to changing its character). Use quotation mark. If we *mention* the indexical rather than *use* it, we can, of course, operate directly on it. Carnap once pointed out to me how important the difference between direct and indirect quotation is in

Otto said “I am a fool”.

Otto said that I am a fool.

Operators like ‘In some context it is true that’, which attempt to meddle with character, I call *monsters*. I claim that none can be expressed in English (without sneaking in a quotation device).

(Kaplan, David “Demonstratives : An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals”, J. Almog et al. (eds) *Themes from Kaplan*, Oxford University Press, 1977 / 1989)

「ある文脈では…は真である」(In some contexts it is true that) のような演算子は存在するだろうか。もし存在するとすれば、この演算子が文の頭に置かれると、ある文脈においてその文の表す内容がその文脈の状況において真である場合に限り、この文は真となる。試してみよう。

(9) In some contexts it is true that I am not tired now.

(ある文脈では、私が今疲れていないということは真である)

現在の文脈において (9) が真となるには、ある文脈に置かれている人がその文脈の時点において疲れていなければよい。しかしこのように解釈した (9) は、私とも今の時点とも何の関係もない文になる。だがこれは第2原則に違反する(注1)。第2原則をもう少し理論的に表現すると、指

標詞は常に最も広いスコープを取ると言い換えることができる。もしこれが正しければ — 実際正しいのだが — 自分のスコープ内で指標詞のキャラクター（注 2）をコントロールできる演算子は存在しないことになる。指標詞は演算子のスコープの外に飛び出して、演算子の前に出るからである。私はこのような言語を作ることができないと言っているのではない。単に英語はそのような言語ではないと言っているのである。そしてこんな演算子を英語に付け加えることもできない。

しかし、指標詞をコントロールし、最も広いスコープを取ることがを阻止して、おまけに他の文脈を参照するようにする方法はある（これは指標詞のキャラクターを変えることに等しい）。引用符を使うことである。もし私たちが指標詞を「使う」のではなく、単に「言及する」に留めたら、もちろん指標詞を直接操作することが可能になる。いつかカルナップが私に次の直接引用と間接引用のちがいがどれほど重要なものか指摘してくれたことがある。

Otto said “I am a fool”. オットーが「僕は馬鹿だ」と言った。

Otto said that I am a fool. オットーが僕は馬鹿だと言った。

キャラクターに干渉しようとする「ある文脈では…は真である」(In some contexts it is true that) のような演算子を、私は「怪物」と呼ぶ。私の考えではこのような怪物は英語という言語においては、こっそり引用という手段をとらないかぎり表れることができない。

注 1：第 2 原則：純粋な指標詞も指示詞も直接指示的である。

注 2：キャラクター (character) とは、発話文脈 (context of use) から「意味内容」(content) への関数であり、「意味内容」(content) は「値踏み場」(circumstance of evaluation) から外延への関数とされる。たとえば指標詞 I については次のような関係が成り立つ。

- i) 代名詞 I の character は、発話文脈 (context of use) を参照し、その文脈における話し手を指すという意味内容 (content) を定義する。
- ii) この意味内容 (content) によって、「いまジョンが話している」という値踏み場 (circumstance of evaluation) において、I は外延として話し手ジョンを指す。

(120) 考 察

Kaplan のモンスターとは、指標詞に作用して別の文脈を参照するように仕向け、たとえば 1 人称代名詞「私」が話し手を指さないように変えてしまう怪物である。Kaplan は英語という自然言語にはそのようなモンスターは存在しない（そしておそらくあらゆる自然言語にそのようなものはない）と考えた。

唯一の例外は引用符で、引用符は文脈を転換してしまう転轍機として働くモンスターである。引用符のない間接話法の Otto said that I am a fool. では I はこの文の話し手を指しており、代名詞 I のキャラクター、つまり当該文脈において話し手を指すという意味内容どおりである。ところが引用符のある直接話法の Otto said “I am a fool”. では、引用句内の I はこの文の話し手を指さない。引用符は当該文脈とは別の文脈を参照することを求めるモンスターである。

しかし Kaplan は気づいていないかもしれないが、これ以外にも文脈を変えてしまうモンスターは実はたくさん存在する。

(A) 小説などの虚構

一人称小説のなかの「私」は、たとえ私小説であっても作者自身を指していない。

ex. 吾輩は猫である。(吾輩は夏目漱石ではない)

(B) 演劇・映画

女優堀北真希が「嵐が丘」を演じているとき、セリフの仲の「私」は堀北真希ではなく作中のキャサリンを指す。

(C) 代名詞のメタ言語的用法

「私」とはやっかいな代物である。

(D) 反実仮想

次の文の 1 つ目の I は当該文脈の話し手だが、2 つ目の I は当該文脈の聞き手を指す。

If I were you, I would hate myself.

16. 他者の発言の引用ストラテジー再考

(121) [= (3)] (カンタス航空の) 切符の reservations の女の人は京大で経済を勉強しました。でも、私は彼女にあなたは後で Qantas の経済かん、経済課で働くつもりですか、あ、彼女はいいえと言った。あ、これは私の仕事です。あ、たぶん、あとで結婚しましょう。私はびっくりした。京大はいるのすごく…

(122) so we're stauing (i.e. standing), looking at this, wen this wuman come along and said, what were we looking for, and we're looking for somewhaur to stay the night, 'Where do you come fae?' 'Scotland', 'You're no feart of coming here withoot somewhere to saty', so she gi'en us half a dozen addresses. (Clark, Herbert H. & Richard J. Gerrig, "Quotations as demonstratives", *Language* 66(4), 1990)

そこで、まあ、つつ立ってて、この、まあ、見てると、ある婦人がやってきて、何か探してはるのんかって、どこか泊まるとこ探しているんやってと、「どこから来はったん」(言うて)「スコットランド」(っちゅうと)、「泊まるとこもないのにやって来るなんてえらい度胸がありますねんね」(って)、それで住所を 6 つばかりもくれはったってこと。

【考 察】

英語では他者の発言を引用するとき、発言者と She said のような発言動詞を省略して直接引用することがふつうに行われるのに対して、日本語では同じことをすると不自然になる。この違いはどこから来るのか。それは両言語の、情報の帰属領域とパースペクティブへの敏感さの違いに起因すると考えられる。

(123) 新規導入情報に関する制約

E において非共有の情報で、対話の場で新しい情報として導入されたものは、当の対話セッション中は、初期状態において共有の知識と言語的に区別され続けられねばならない。

(田窪行則「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』vol. 4、1990、)

引用者注)E とは対話にあたって利用される知識データベースで、一般的な知識、これから話すために必要な用語体系、相手と共通の体験や知人、これから相手に

は話す内容のようなデータが格納されている。談話モデルの共有知識領域に相当する。

(124) 談話への名詞句の新規導入

日本語では、裸の固有名は、共有の知識を示す。従って、なんらかの意味で共有されていない人物を導入するためには固有名は使えず、普通名を使う。固有名を普通名にするいちばん簡単な方法は「という＋基本範疇名詞」を使うことである。

(14) きょう、田中四郎という人に会いました。山田さんをよくご存知だとおっしゃってましたよ。

(…) 相手が知らないと想定される人物を導入する場合も基本的には同じである。

(16) a. 僕の友人に田中という奴がいます。まじめだし、英語がよくできるので適任だと思いますが。

b. その人物は独身ですか。じゃ、その田中という人に頼んでください。

a. じゃ、田中君に頼みます。

(…) 「田中さん」をよく知っている私にとって「田中さん」はあくまで「田中さん」であって、「田中さんという人」ではない。従って、最初の導入のためのセッションが終われば、私はこの人を田中さんと呼び、「田中という人」とは呼ばない。反対に、あなたは、田中さんはあくまで「田中さんという人」であり、「田中さん」とは呼べない。

(…) 日本語は、対話に導入された知識に関して、対立的視点をとるといってよい。対立的視点を取る限り、導入された要素には、その視点のマークが付くことになる。これが「固有名（自分のもの）」、「固有名という N（相手のもの）」の差である。

(125) 言語空間の独立性

西欧語における三人称代名詞は、基本的に談話指示的である。つまり、指示対象が先行談話において導入されておればよい。これは、西欧語では一人称・二人称の立場的視点から独立しているものを三人称としておくだけでよく、対話の前から確立しているか、対話の最中に導入されたのかの区別をする必要がないからである。

そこで、西欧語では、対話的談話でも談話構造はある程度まで言語場から独立したものととして扱うことが可能である。(…) 談話に導入された要素は、話し手と聞き手以外はすべてである独立した談話世界を構成していると見ることができるのである。

(…) [これに対して日本語では]対話で初めて導入された要素は、その知識量の相違から、導入した責任者を明示しなければならない (…)

(田窪行則「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版、1991)

(126) 考察

英語などの西欧語では、固有名に限らず、談話に導入された要素は、いったん導入されれば話し手・聞き手から独立した言語空間の要素とみなされ、話し手も聞き手も平等にその要素にアクセスすることができる。これに対して日本語は言語空間の独立性が弱く、新しい要素を談話に導入するときに、誰が導入したかを示すマークが必要であり、その談話

の続く限りこのマークが消えることがない。他者の発言を引用するときのストラテジーの差はこの違いに起因すると考えられる。

- a. ‘Where do you come from?’ ‘Scotland’, ‘You’re no fear of coming here without somewhere to say’, so she gave us half a dozen addresses.
- b. その人は「いいえ」と言いました。そして（その人は）「これは私の仕事です。あとで会社をやめたら結婚するでしょう」と言いました。

上の例 a. のように、英語で she said のように発言者と発言動詞を明示せずに他者の発言を引用できるのは、元発話者 (she) や発話者 (I) が談話に導入した情報であるというマークを英語が必要としないためである。誰が談話に導入した情報であっても、談話の参加者は中立的言語空間に置かれたものとして等しくアクセスすることができる。

これにたいして日本語では、「その人は…と言いました」のように発言者と発言動詞を明示して、誰が談話に導入した情報であるかを明示する必要がある。これは日本語では言語空間の独立性が低く、談話に導入された情報にアクセス制限がかかっているからである。

【付記】

この講義の後で次の文献の存在を知った。本講義で論じた語用論的括弧トパースペクティブシフトと関係が深いので参照されたい。

木村大治『括弧の意味論』NTT 出版、2011

私的使用や著作権法によって認められる範囲を超えて、本内容を使用（転載、複製、改変、掲示、配布などを含む）することは、著作権法により禁止されております。